



利根川番志

五

ル 4
6317
5





利根川圖志卷五

下總 布川 赤松宗且 義知 著



麻賀多大明神

公津村稷山の上

あり里人てくろの延喜式

載了所印播郡一座麻賀多神社是あり公津の村名臺方と本と

て。下方江弁須大袋飯仲。之乃公津不属をま。公津新田あり。古

へ神津と書たるより。今臺方の下不鳥居河岸ありて。沼の中不

鳥居建り。あまをふいち神津あり。佐倉風土記云 應神天

皇御宇。印波國造。伊都許利命。齋祭。稚産靈神。攝社本三十八座。今

存者五座。曰印波國造社。曰幸靈神社。曰馬來田。即女神社。曰猿田

彦神社。曰天日津久神社。社司太田氏家。藏貞治永正官幣。祝文其

祖家清記詳焉。有七井七臺。併在社外四方三百步。所謂初井。花井。

北井。南井。御平洗井。大井。椿井。乾有説教臺。北有北野臺。東有元松

五 印東

臺南有平松臺。天神臺。西有社司殿。臺花輪臺。神門左右百二十步。有七冢。正月七日採七種菜於七冢而薦之。古有祭田七區。七氏分掌以供祭祀。油免。薦布免。德掛免。團子免。神酒免。御齋免。巫免。是也。今僅存其名耳。倭俗曰租

神津八十墓 在神津村東北二三里原上。多數故名之。傳千葉氏也。世之瑩然不詳名誌焉。

超林寺 在神津臺方。文明十三年平輔胤建之以常陸國杉室大雄院五世周齋和尚為開山焉。

平貞胤墓 在神津麻野。碑誌曰千葉貞胤當鄉諸人各敬白于時觀應二年辛卯天四月日其石今在超林寺庭際焉。

公津宗吾墓 公津村臺の山中にあり。成田より一里西の方あり。墓碑左の如し。

德滿院涼風道閑居士 右の脇に道了彦七道明 德治左の脇

小道安乙治道露 德松とあり。おの四人の子供あり

又同村菩提所鳴鐘山東勝寺 真言の過去帳に道閑信士 俗名

宗吾 兼應二癸巳年八月四日と見ゆ。是もとの改名あり。その後

寶曆二申年百回忌の節涼風道閑居士と改め。そめて石碑と

造立せらまるとあり。寛政三亥年院號とそへて今の石碑

に改め建つとあり。石碑に四人の子供と。皆男子の名ふまると

たるとあり。是れ宗吾出訴の以前四人の子と遣して離別せると

あり。故に妻は宗吾死しての後十七年とあらへて寛文九酉

年九月十四日不病死とあり。改名は妙閑信女とおれり。過去

帳不見。ゆ宗吾の父子五人。樂楽せらまるとあり。世人のよく知る

ところあり。

東勝寺本堂に在る位牌の文左に

位牌の表

道子 道明
德滿院涼風道閑居士
道安 明露

同背面小

道閑 俗名

了 長男 彦七
安 次女 ホトウ
明 三女 ホトウ
露 季女 トチ

兼應二癸巳秋八月四日父子五人爲國民捐命寶曆二壬申年。正當二百四忌而改涼風道閑居士。又享和二壬戌執行一百五十四忌之法會。寛政三辛亥追謚德滿院。造立石塔。皆依領主之命。茲嘉永壬子係二百遠忌。由是造立廟堂及神像神版等。若于物以當法事。克追遠之禮。

鳴鐘山主照專拜誌

鷺山壘

在神津村上千葉氏世居之天正中良胤時城廢焉

藥師寺

船形村小あり本尊藥師佛ハ行基僧正の作開基不詳

鐘銘曰

下總國印東莊八代郷船形藥師寺應長元年亥年十一月願主僧良圓敬白大工沙弥善性と見也

船形神社

佐倉風土記櫻山内津社在船形村千座山距櫻山社可

二里亦伊都許利命齋祭雜日灵尊以爲瀧津宮攝社三座曰賀志

波比賣神社曰阿須波神社曰八代稻荷神社是也云

根山神社

北須賀村門河とつ小所小あり牛頭天王と祭る此所

鳥獵茅一の場と云ヤウギリ綱あて捕切と云義あり此邊沼

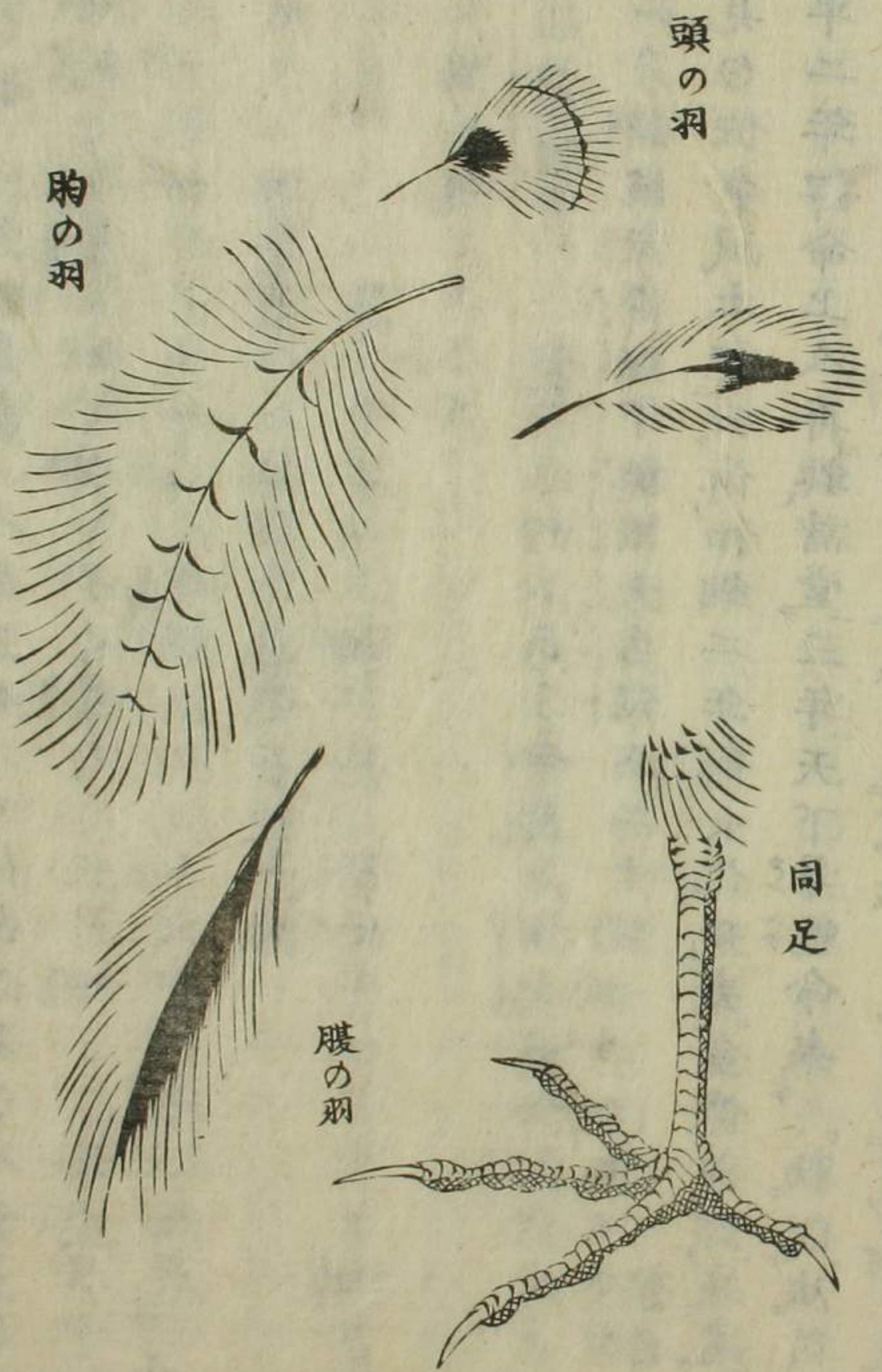
小真菰多一水鳥ハマコモの實と好て養了者也マコモの實ハ

麥の如き物不して人え是と食之詩佛西遊詩草云今美濃國

氏宅食菰米菰米之著於書自屈原以下及唐宋之詩人言其美者

多矣我邦未聞有賞之者予食之以今日爲初因賦一絶而記其事

淡於蕎麥香於稷真味初知在水脚非向君家留竹枝一生不信



ヤハライボ



素真

有菽梁 菽米一名菽梁

谷原イボ 六の鳥畫ハ人目小めくら故不見人稀ふ也大さ

羽色とも鶯小似て黄多多く帯たり五月頃より昏夜中あて

ス細くボウイ大声と鳴く聲螺小似たり大倉州志七物産羽之屬蘆

車々 潜蘆葦中北郷謂之蘆鴉夏秋入餌

ホシく鳥 小鳥あて谷原小栖む夏月昏夜小ホシくと細き聲小

て鳴く鳩より小さ

天竺山龍角寺 龍角寺村小あり寺南小洞穴沙伽陀池と名所

あり諸國圭齊録下總國天台宗小二十石 植生郡龍角寺村 龍角寺と

見也佐倉風土記云傳和銅二年龍女化現奉金像藥師來建寺天

平二年釋命上人再興諸堂三年天下旱魃命奉 勅說法祈雨一

叟長可八尺進曰我小龍常居南池深浴上人法澤何惜一軀請以

身換雨後必見我骸而證之即是為大龍所罰也忽然而去雨從至

馬後七日果有龍身分裂三段頭墜于此乃金字寫經併座堂下寺

始曰龍閣於是改龍角腹墜于印西龍腹寺其尾墜于香取郡今大

寺村龍尾寺是也貞觀元年慈覺大師住此說法天曆三年三月八

日異僧來彫金剛神一軀畢忽失所在柱上留題曰此寺藥師乃西

天竺祇園精舍療病院之像故我為彫金剛神而猶恐人不信一軀

而止我是昆首羯摩也正曆中運慶續刻右金剛神化作即左今共

存焉兼久二年上總介平常秀重修營常秀千葉常重曾孫稱坂平

次兵工也正應三年十一月鑄巨鐘文明中焚如而寛永三年改鑄

焉文明永正再罹火災平勝胤修造焉天正八年又有災平邦胤重

造營焉相馬日記云松崎村とあり所より行くらとて登る小

むつう一の朔日十五日廿八日ハ天竺山龍角寺小龍神の社あり月

とこの朔日十五日廿八日ハ天竺山龍角寺小龍神の社あり月

くさしふはへりとそのまきくて谷下八千把の池とて水多
くもふさき有りのとふまきくて谷下八千把の池とて水多
つめりこの池のあさこへ一日千把の苗とてうゑむとかせこ
る子孫に遺れぬとてふまきくて谷下八千把の池とて水多
池とてりふもそれとて
負へる名ふとそ

駒形明神

安食村にあり佐倉風土記云社司木内晴風十五世木
内三郎宗文正安二年九月記曰下總国埴生郡安食郷駒形神社
郡司大浦朝臣廣足所祭穀神也天永二年夏五月廿一日安食郷
大水同三年夏大旱仁平元年夏六月十五日又大水民大飢凡三
年矣於是同年秋九月九日建社於駒形山上用祭五穀神焉其社
號曰駒形神社同二年五穀大孰是年郡司令曰是則神之賜也自
今以後民可得安於食也請改號其郷曰安食郷又置神田使木内
晴風掌祭祀焉安食郷舊名川崎郷郡司大浦朝臣廣足 崇神天
皇七世孫御諸別王之苗裔也今社司木内氏藏之享保四年吉田
兼敬郷書跋云

鷲宮

同村印播江へ指出たる山の頂ふあり別當正徳寺毎年正
月十一月初酉の日遠近の老若参詣群集を此所印播江の下流
ふて長門の口と云長門のありあて印播江と將監川と落合ひ
夫より東の方へ五六町流れて利根川ふ合を三方の船着ふて
至て賑へく繁昌の地あり

布録新田

南將監川と北下利根川との間あり一嶋あり其の嶋
上へ木下より下安食まで堅二里横一里とり元録年中開發
村數二十五川除堤周圍長六千四百五十七間其内三千五百五間
へ北利根川通り二千九百五十二間へ南將監川通りと古書に
見えたりされど古くよりあり嶋みや常總軍記に布録ふへ
布録但馬丸岡喜一同彦市あど見えたり

藤藏河岸

生板真山新田兩村入會の地あり下總常陸兩國ふ跨
る其れめ藤藏と云獵師住し所也其名起きりとそ今へ利根

川運送の荷物龍ヶ崎邊へこの河岸より上下する由至て繁

昌のところあり龍ヶ崎 江一里

龍ヶ崎 常州河内郡あり仙臺君の御陳屋あり享保十三年水無

月下旬みちのく此大守羽林中良將吉村とつゝ了る鹿嶋

道の記に云その日へ道とるうりなれば暮ふなり戌の刻をく

る程ふ布川とつゝ了る所に着てやどりぬ又の日常陸の國ふい

ぬるづぐふ二里斗ある道なれば己の刻をうりたに至りつたぬ

是龍ヶ崎あり爰ふも二が領地のありなればとここれ者ども出あひ

てあるひしてりあことなと見せ侍りぬそのらみ文治の比に

ひ我祖常陸入道念西宗号朝 同宗村等の住給ひ一真壁郡中村の

庄に此ところより十餘里を越えてもさうなるとし残つた

此度とふ来り序不見まほしくおもひ一ふんど遠なれば見

てして過る事りと本意ありの朝村主のめと初とおもひ

それと筑波根の末を輪の田井も住あれふなりとよと給ひ一
へ新拾遺不入侍了にやとれり昔の事とたひひ出て見ぬ世
の事もあつたりうりなれば

近めらば行て見よ筑波根に裾る乃田井の世々のあふ

あと北ふあさきて古城なりこれへ天正のころ土岐左衛門尉

頼貞とつゝる人住たる城ありといふ四方小堀のくさありて

築立たるやうある山城あり樹木枝とおるひ茂る所はた中

ふ太神宮鹿嶋の神社あり上へ平らふして中ふ谷をへたて

て二の曲輪とつゝと見えこり其曲輪の東ふ龍ヶ峯とい

へるととゆかり爰あのをみて見渡し侍るふ東へかきまけ海

見えて眺望かぎりなり南へ田面さうりふ片がらありたり

田子のさあへりるはま菅の小笠うらきて聲残あげてらこ

ひのくさるは万いと真ありてまばらしく時をうつぬ

乙女子^{とら}笠^{かさ}のあはれく小^せ山^{やま}田^の小^せ早^{はや}苗^{なえ}とるてれいとほあげな
 る爰^{こゝ}と出^いて大^{だい}統^{とう}寺^じ盤^{ばん}若^{じやく}院^{いん}あといくる寺^じ小^せ行^{ぎやう}ぬ寛^{かん}永^{えい}のころ山
 戸^と土^{つち}佐^さといくるもの此^{こゝ}所^{ところ}小^せ久^くしく住^ま居^いせまそけ人^{ひと}建^{けん}立^{りつ}せ
 一^{いつ}寺^じありといふ今^{いま}の領^{りやう}地^ちのうらあまばりさ、りの寺^じ領^{りやう}残^{ざん}つ
 け置^おぬあふどれ僧^{そう}爰^{こゝ}小^せきたる事^{こと}とよろこび出^い會^{かい}てとえなひ
 ありく南^{なん}小^せあたりて愛^{あい}宕^{どう}社^{しゃ}ありをれいちり此^{こゝ}盤^{ばん}若^{じやく}院^{いん}別^{べつ}當^{どう}つ
 とむるとて先^{さき}たち行^{ぎやう}ぬこの山^{やま}下^{した}小^せあふと塚^{つら}といくる古^こ塚^{つら}あ
 且^{かつ}何^{なに}の由^{よし}あありともあらだむりしよちひつとふる名^ななり
 といふ見^みるにわがとのもちとふせさやふる形^{かたち}あり夫^{それ}のあ
 うくのくふるあふべし夕^{ゆふ}つくと舎^{しや}を小^せ入^いて由^{よし}あふとふとてを
 へがさわりしちつと志^しめぎくれのひふと志^した、めてあ
 お小^せ日^ひをくらし侍^{まじ}る小^せ庭^{てい}の木^きぬりさ隠^か小^せ蟬^{せみ}の鳴^なを聞^きく
 おのがあはれうあさみえ猶^{なほ}この頃^{ころ}けあつさやあは蟬^{せみ}の鳴^な

らや夜^よ小^せ入^いて所^{ところ}小^せ侍^{まじ}けあく目^め代^{だい}郡^{ぐん}司^しあど残^{ざん}めし出^いして今^{いま}
 での所^{ところ}れあさてふどくはしくたら証^{しやう}あらさふとめは事^{こと}おや
 かま日^ひが本^{ほん}國^{こく}小^せ替^かり他^たの領^{りやう}地^ちもまとりたる事^{こと}あればはらふ
 心^{こゝろ}をつけて民^{たみ}の勞^{らう}をふくつとふべしよえ人とあらそふ事^{こと}
 ふくれあどひひふくめあまの河^か船^{ふね}小^せ乘^まて潮^{うしほ}來^きのつらや下^{くだ}
 るべし船^{ふね}の數^{かず}出^いさむもところれまづらひしよあし供^{くわ}あふ
 せのも半^なハ中^{ちゆう}湊^{そう}ちで陸^{りく}地^ちを侍^{まじ}るいまべしきたしきりさり船
 みては老^{らう}しよとべしよささめていさふけゆけはらや
 まみんせ夜^よ半^{はん}まご頃^{ころ}より風^{かぜ}吹^ふ出^いぬ明^{あけ}行^{ぎやう}頃^{ころ}のふ行^{ぎやう}てあひ
 侍^{まじ}る大^{だい}統^{とう}寺^じ盤^{ばん}若^{じやく}院^{いん}來^きりなひめいしちり我^{われ}このところふさ
 たふさるしふとて筆^{ふで}の物^{もの}といさくのぞさしうバ辞^{ことば}がこくて
 大^{だい}字^じふ書^かたぬ詩^{うた}を彼^かありの僧^{そう}あさへぬ寺^じの具^ぐとなさむ
 とてよろこびあくるをいとくさつとくわめてあむむ

ごあり猶風やまぐ船のうらちいりぐとせむべ追手ふきばさ
りあらとと宿のゐるトのふみちうせて日出る頃ふ出ぬ一里
餘り行て利根川のやとりに至る藤藏より船ふのれり側近
さもの十餘輩とらざりておふト船ふのる外さふ此の船五
艘ふまつらへて漕出ぬ所の男女川岸ふはどひ見物せりいと
それぐまー浪まこー高うちーかども河船ふれば何のあゝ海
ら紀事もふーあつさへと云れそて、身ふーむ風の秋うとば
うりあるとる

こぬ秋さうかべつ船ふりうふくと追手まぐーと川うぜぞ
ふく

潮來の宮本水雲云龍ヶ崎ハ信田郡江戸崎の城主土岐美濃守
治頼が二子左兵衛督胤倫の居城ふと其上正平五年北朝康
日中將顯國三村より起りて馴馬沼田城ふ入とつふ事鶴岡社

勢記ふええたるハ土岐氏の後ハ棟とる龍崎ありへ馴馬不
古城あゝ龍崎ハ其隣村もて殊ハ新地ふまハなり且其城田地
を東南ふうけて沼田といふ名目もつあつり云、

常總軍記卷十二云常州江戸崎ハ土岐主膳龍ヶ崎ハ土岐大學
津守頼光の嫡頼國の末子美濃守頼房始て美濃國土岐郡住
是土岐の先祖ふ然る其頃人皇七十二代白河院御宇兼
曆年中六孫王經基の次男武藏守滿政の曾孫ありて駿河守定宗
とつふ人頼義義家御父子の武門棟梁の如く君の御おえも
よまくとそねいり小身なれハ自力ハ叶ひたる頼房の家
督美濃守国房とて、めて隱謀とふやりかくて濃刑青の原
一戦ハ打たけ定宗ハ腹切て死に国房ハ罪と謝して降参せり
官大寺大納言殿を数年とへて土岐右京大夫頼統常陸の国房本
徳大寺大納言殿を数年とへて土岐右京大夫頼統常陸の国房本
崎土岐の祖ありされハ年へて武勇の家ふれハ近郷を伐とり
推塚駒塚羽賀小の古渡大屋佐藏君嶋大室あひハ近郷を伐とり
佐塗戸半田長峯君山長掉以下都合八十三郷と持つハ信田
郡河内郡ふとひのり右武勇の臣下多く籙下又數多あり元來
同流ハ助けて今ハ兄弟の中也去龍崎後誥セハ心ハ近國の輩
り是を助けて今ハ兄弟の中也去龍崎後誥セハ心ハ近國の輩
も是とらり江崎と攻れハ又龍崎後誥セハ心ハ近國の輩

稻敷郷 龍ヶ崎の東あり八代村といふとあり宮本水雲云今の

八代村ハ和名抄稻敷郷あり今ハ其地ハ稻塚と云ふあり風土

記常陸風土記也信田郡の下ハ風俗諺云葦原鹿其味若爛喫異山実矣

常陸下總二国大獵無可絶尽也其里西飯名社此即筑波岳所

飯名神之別屬也とあり葦原ハ今龍ヶ崎以下長棹源清田より

下總の地ふのたり新田とありさる地ありて古葦原あり一時二

国の畝あり地あり残以て二国の人々獵せし所と云えたり

扱飯名ハ即後ハ稻とつちりしものありて稻敷といへるハ飯名

の神の敷地あり故此名あり後ハ八代とふれりも社ありて其神

社より地名といふなり此地下總相馬郡於賦駅續日本紀按和

名抄郷名の意都郷より此地とて信田郡榎谷駅今羽賀村也

同地而今其地不詳

ふのさる古の官道なり故ハ扶木抄喜多院入道稻敷の里ハ

らそぬいらんり孫ハ次郎百首鴨のりくれぬもり

りふせ皆此地とよろり歌あり是官道あれば自然詠歌のま

栗林義長傳 常州岡見の長臣栗林下總守義長といふハ同國河

内郡根本村の農夫忠七の三男竹松の孫あり云傳ハ常總

軍記卷十云 文畧 根本といふ里ハ一人の農夫あり名を忠七と

いふ貧乏者といふとも慈悲ふりて正直ふりて一人の母ハ

孝あり或時母少一病事有るふ是残れんと土浦不至り藥

と求め其りへるさ根本ハ原ふり、まり人里遠き野原ふりて

道ゆく人も稀ありたるふの古狐松のりけハ寐入て居たりけ

ると其ありて獵人志のびよりて射てとらんと秘らひりて

の忠七ハ是と見てふむんと思ひ助けやらんと高らハ不咳と

ふたりりりバ狐ハ大ハ驚きて目を覺ハ草むらの中へりり

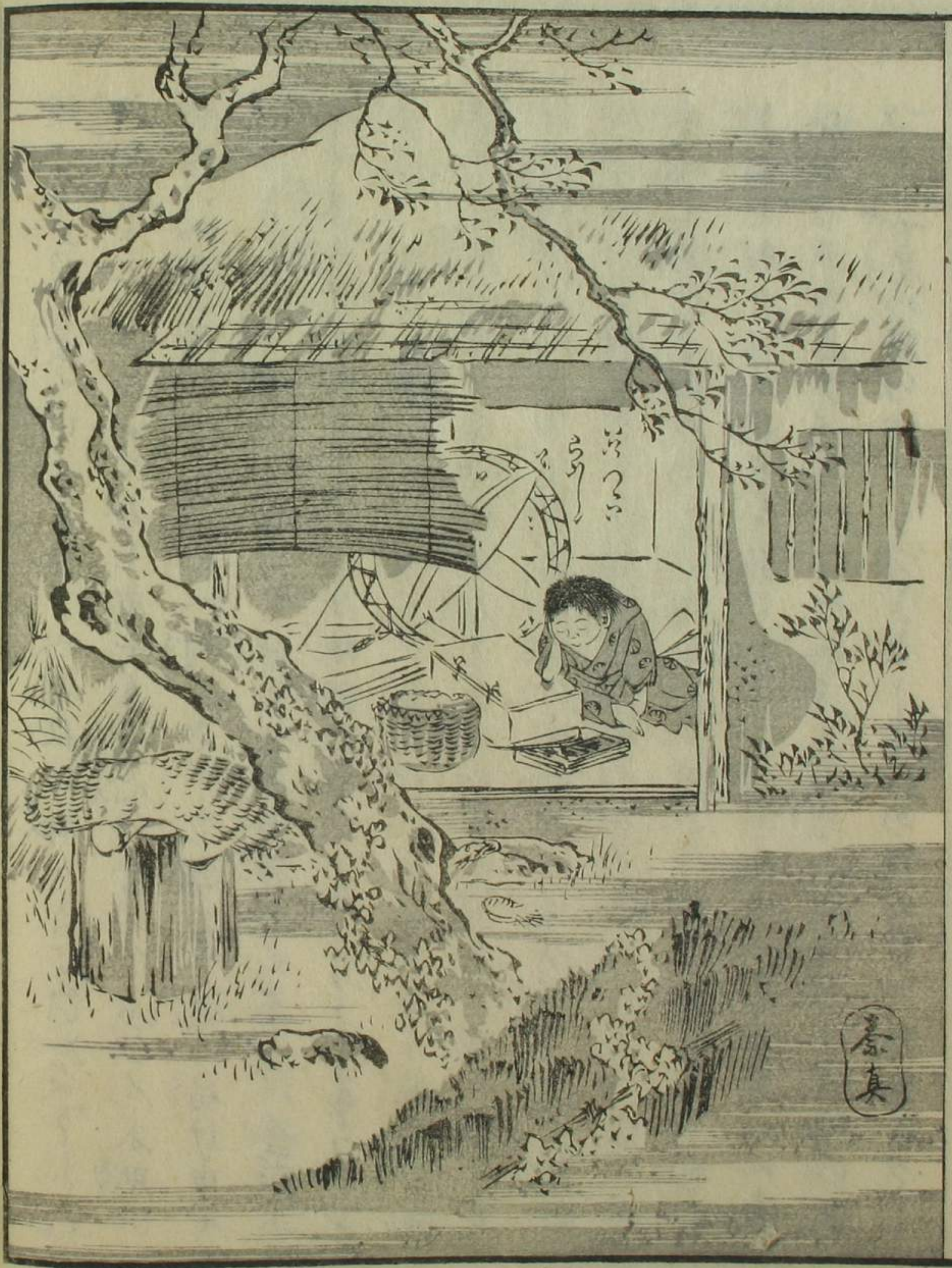
入るる獵人の大ハ腹立獲ものをりへせとのりり由忠七

さぬぐと詭言ふれとも獵人のさらふ聞入る忠七是非あく
二百文有るる錢せりの者ふ遣へりやうくとまびして我家ふ
帰らり然るふ其日の暮つり五十有餘の男一人をたち斗
の女を連て忠七方ふ来り云らるやう我ら奥州の者あて鎌
倉へ行とのあるが日暮て難義ふ及ぶ何卒一夜の宿をわして
たべと泪ふがらにひらぬ故母も忠七もふびんと思ひ道も
志まぬ野原なるた足弱を連さるくバ定めてあんざるべし
一夜の明させはつと其夜の二人をとめさうりなり借翌
朝ふふとそれバウの女泪をるが云らるやうとづらら奥
州岩城郡の者あて不仕合の事ありて身上と志まひ鎌倉の
伯父の所を尋ねんと譜代の家來を供ふつれ此所より来り
が昨夜より寐入し時々の男の路用を持て逃しと見ゆらもく
もくやうれ最早後へも先へも行がたし何とぞ鎌倉へ参る

迫いりある憂くげんも仕るべん御くらひたぐり
泪流して頼るに母も忠七も實心の者あてふむんと思ひ
然らぬ四五日足をやせめ給へ何とぞして鎌倉へ送り届け申せ
べしとてさし置らるかくて此女容顔美麗のささらだ發明ふ
して農の業も是より早く糸機針仕事ひと川としてあらさる
事あく何夏もやさしく母もよと仕へり母も殊の外氣
ふ入近所あたりの者迫も誉さる人いふりなりうて月日
小関守あて四五日と思ふ内ふや四五日も過るるが近所
の者心つき母と忠七も相談し隣家の弥兵衛を仲人とる一及
方咄し調ひし故忠七と夫婦ふをいふりなり早くも八年の
星霜を経て三人の子を設け姉のお鷹は七才ふなり其次は龜
松とて五才あり三男竹松は三才あて成ふらる折しも秋の末
つら女房の庭の方をうづくとして詠め居るるが泪をまぐり



みどり子の
 まつとこり
 をまじけれ
 まつと
 あつと
 ふすと
 こつと



とこそ思つても人間に相あはさざるのふらふらと思ひしがもはや
ハとせ残過ましまそうら三人の子追設けおひ一夏あきど浅あきやうさ根
本が原ふ年経たふ狐ありひととび人ふさとられて人間界
の住居すまひあはる畜生の行へこそあふれと涙を流し一人
おとて泣きめけども悔てうへらぬ身の上ありさるあても
不使ふびなすい三人の子供いとをさる母うへ様忠七殿も名残
を此こゝゆく別きて行ふさばさぞや後みせうらむらん堪思志
てとて忠七どのとくせりへしとせさくる泪と諸共あとも一詩を
まゝめ竹松が帯へ結ひつけ夕暮ゆふぐれふ根本が原の古塚ふるく
く別きて帰かへる

昔日贖死野狐身偶嫁人間入忠家鴛鴦被暖八年夢積夢丁女
二男生花晨月下撫前後某日冬夜懇紡績被知丁朝吾牛所帰
去古塚自別離別離悲淚今難堪月三更女化之原

みどり子れ母いと問ひ女化の原ふあらくと答へよ
さて忠七い三人の子供を養育後三男の竹松成長の後京
都小行て身を立其孫十二たごめて古郷あつりて関東へ尋
下り信州の山奥ふて道迷ひ異人小逢ひ其所小五年を
送り内天文地理軍学文武の道小達し十七たごふて常陸の
國へ來りたる爰ふ岡見の臣小柏田の住栗林左京と云者あり
一人娘有たる故此を聳とるて栗林次郎と名付後小下總守
義長と号し関東の孔明と称したる是より後根本が原とをさ
慈雲山逢善寺 小野村ふあり總常日記蹟ふむうのつつの程ふ
ら逢善道人とつらからふ菴やまめてたこさひすうおを
志しと慈眼大師遊歴してあふ來りたを志しと道人大師
小申せやう和僧わそうふ、ふ一字とて給へ大慈者を感得せらる
庵さよりありとわさらひおきて道人だうじんはうせぬ大師不思議ふ

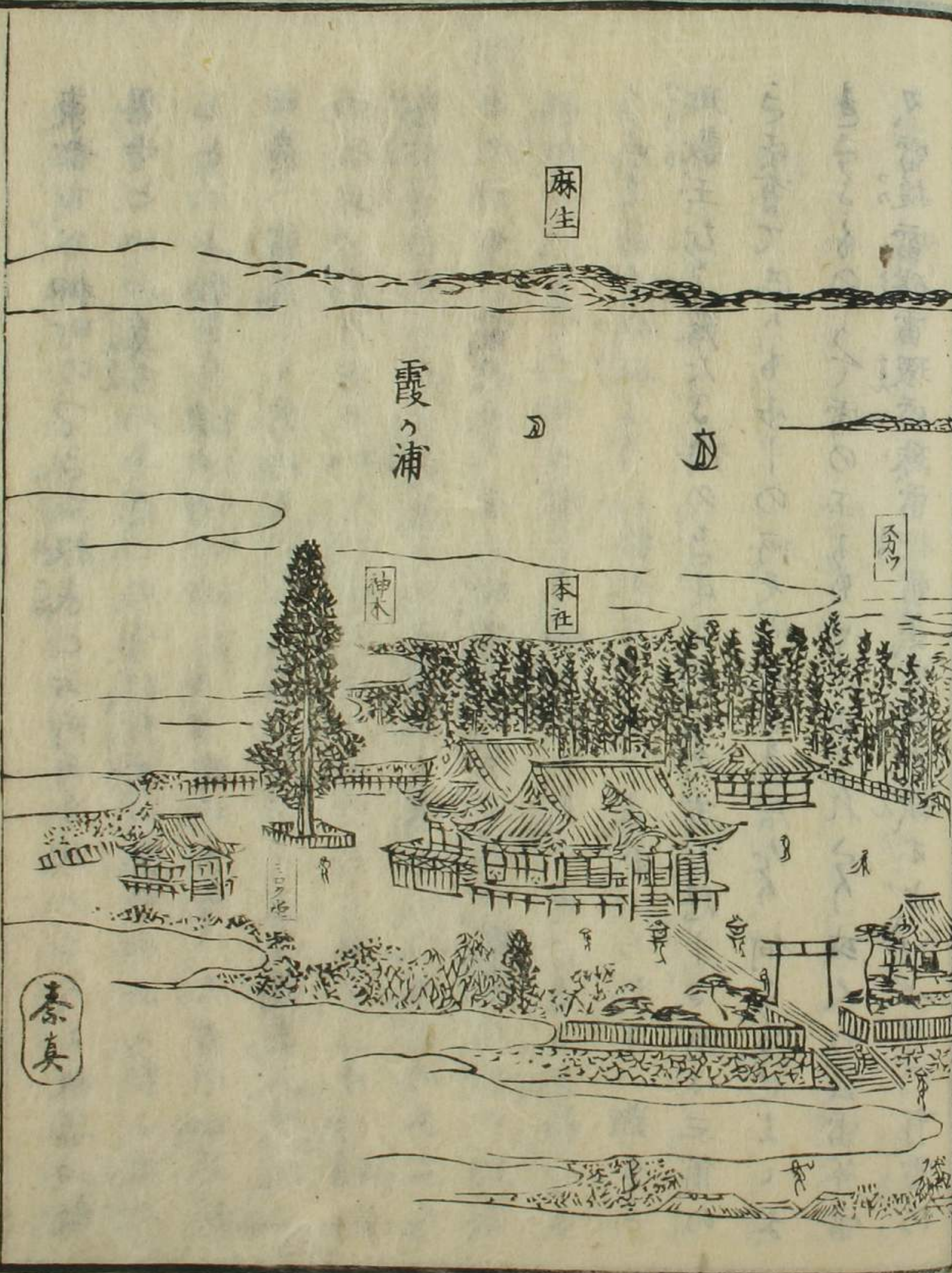
おぼしたるたつづくともなく感得し給ひたる像也と特本堂
いと大きくて莊嚴又さらく二天門などおこそり也廊は
さ小て寺へまうづ逢善寺といひ彼道人の名をとりておや
せたりとぞ今も東叡山末あて寺領二百石云

高田権現 高田村小有總常日記云高田権現小まうづ小野より
廿丁といへり熊埜と同躰小おもそ朱雀帝兼平年中創造とや其後世
々のことさ小あひておとろへたるを慶長七年三百石に神領と賜へり

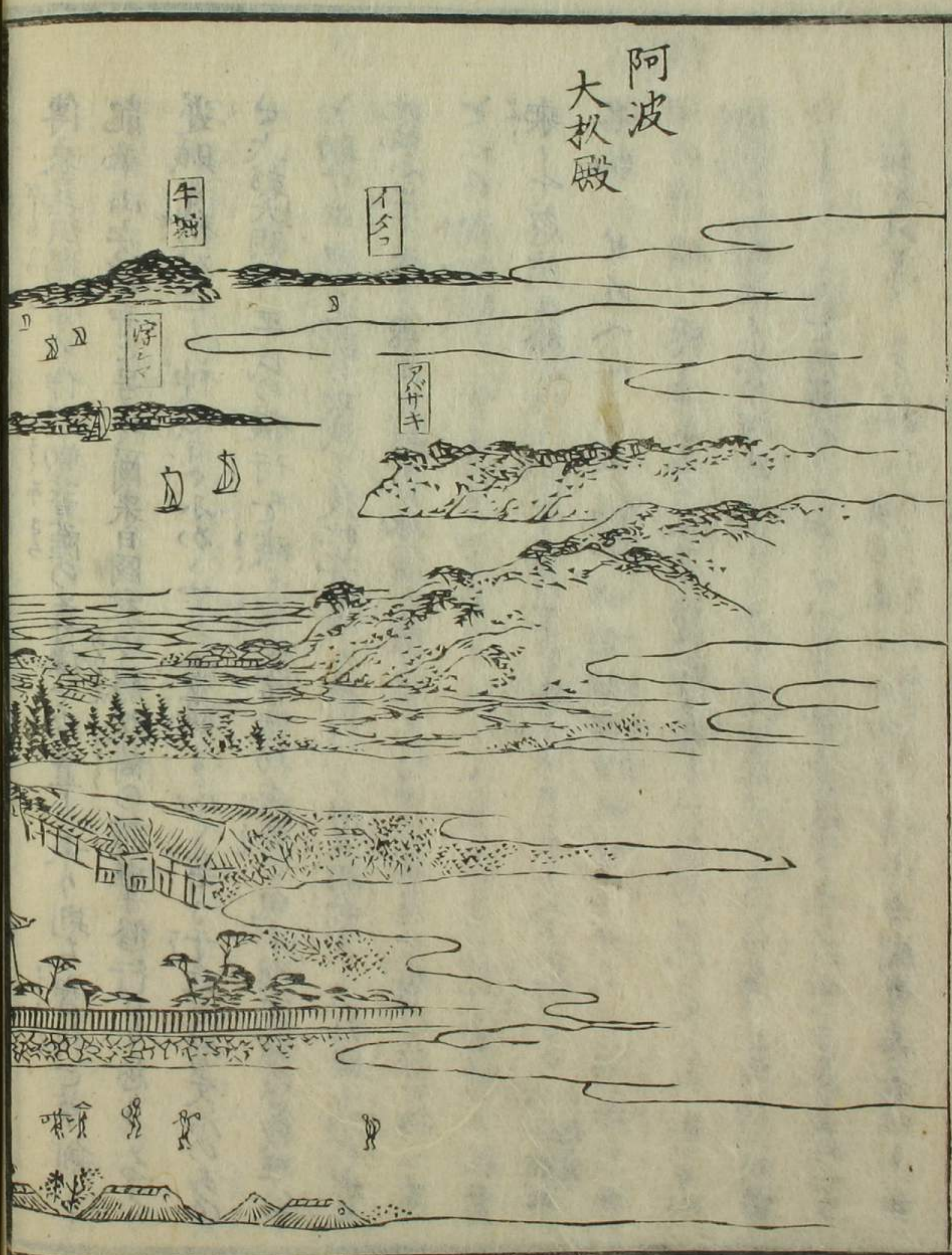
今も本社并殿のこおこそりあり神司と千田九京といふ云

大杉大明神 阿波村小あり別當龍華山安穩寺往昔より今宮大杉大
明神と崇め奉る神祇の神護景雲年中釋勝道上人御作の降魔の靈神
不動尊より其後 桓武天皇の御宇延暦丙子の年傳教大師の御弟子快賢
阿闍梨奥初の逆賊降伏のため大師自ら彫刻を給ふ四魔降伏の不動明王を
乞請給ひ此地小来り靈夢よろて大杉大明神と同く鎮座ふ奉り且天竺

傳來昆須羯摩の作彌勒菩薩の尊像と安置し奉り則ち寶刹と草創し
龍華山安穩寺と号す爾来日國家安穩祝禱の護摩修行日々怠りなく
逆賊も稍滅亡し神威日々小かやと靈驗まよく著り于茲元暦文治のあひ
と大杉大明神平氏の横行を疾く假小常陸坊海存と現し判官源の義經公
を助け平家追討の功成て後此地小帰り我像を自ら彫刻し大杉殿に納め水々
此地小止て天下泰平五穀豊登諸の難厄と救護し病患と穢し悪を抑へ善
とらけ禍福郷音の音應り如くふらめんと言畢て文治五年九月廿七日彩雲
乘りて忽消失給ふ依之例年九月廿七を祭祀の日とし今不行る以上縁起
名物 せんへい 是より西浦須賀津河岸へ十八丁判根川押
信田の浮嶋 霞浦小あり常州信田郡に屬す浮嶋正此に居り今船ツカ山
鞍懸の松蛇峯人見の塚馬もくふとの名所あり又この島の三郎元工門雷
のむらと小物と所持せりと云り石小有す金小有は土小あらん何れもせよめつら
し記えれよりとそ 按ふ雷の落さる所あり想山著聞奇集卷四に云



素真



東都市谷柳町のつさ根来と云所あり此ところ根来山報
恩寺といふ真言の寺有この寺に什寶龍の卵ふらひ雷の
玉といふ物あり龍の卵の説ハ本書雷の玉是ハ大雷の砌早稻
田邊へ雷落し其所おちて有とのことあり裏帛小寛政八
丙辰天次六月吉日天の字也とあり玉のさ一渡一三寸本書ハ
惣躰曇白色少薄藍麗の色を佩て薄茶色の木目のふとく
氷めの如き筋色あり全く碼磁石の如く又ハ蠟石の如く白茶
紺斑の色あてつやも有とも碼磁のことくそこ通る光彩ハさ
く色も品も碼磁よりハ格外劣りたり去まら外ハ類なき
珍敷玉なり落たす時のさそや下の方と思し其所三角の
さそ有て志らも少一の所そと皮とさ居たり何もせよこさ
まこつものうて雷の玉もやと思れり或人の云雷茶雷
刀、雷槌雷礎雷環雷珠雷楔雷墨雷劍雷鑽ハといふもの有雷の

落さす跡も有えの也三味線のむらの如くあて印部の焼物の
こととさ紫黒色ふるハ雷芥ふるへく丸くして僧の袈裟よりく
了掛絡のことくして白色あて青を帯たるハ雷環あて牛角
の如く本太く末鋒り紫色も赤を帯さハ雷鑽あて石もあ
らそ土もあそ漆の如きかこまりハ雷墨ふるへといへり
左まれば是も全く雷珠の類ならんと思はば按ハ此類成ハ門
霞ヶ浦船軍 江戸崎龍ヶ崎の両土岐兵船七十餘艘霞ヶ浦ら
浮へまら信田古渡不出て浮嶋彈正黒田石見を案内と此西
江戸崎の懐懐ハありたり上ハ佐竹近年疎意セハむら心
いりかく思ひしハ彼嶽下を變ハ江戸崎の上岐も味方なり
其勢二百餘両土岐の先手を勤め惣勢合せて千五百餘人兵船
も取のり霞ヶ浦へ押出たり折々ら順風程よくして難場を
はくくなく押て行此より新庄藏人直昌聞て今佐竹より加勢
あさふおそれて土岐勢を船よりあけ立るものならハ川を渡

さき一敵とひとく味方氣おくれして千も利有へくら
以傳へ聞浮嶋黒田々攻手小加ハリ先手を勒むるよし黒田石見是ハ
古一老臣也信田小太郎世盛の浮島黒田とそ船軍もふれしもの
ふき去とも小勢あるへおそろふさらん西土岐り来共
陸路の戦ハともあれ船軍不於てハかこらつてさ次第あり
いさやさへたつて逆寄し手並の程を見せよやん々と下知し
て兵船三十餘艘軍兵五百餘兵霞浦よりへて揉みりんで
富田の岸ふつく兼て新庄り制作あて艘船逆船三十艘船と云
板よてそり切て中のみえささやうり敵船の中へ潜ハきて
四方の窓をあけて子鉄炮をつくへりく仕りけ也。逆船と
自由ハ逆ろを仕りけ敵の中へ乗入て前後左右と西土岐ハ風
もみくして難なく漕渡りて富田をさして行なうまをるう向
みあこつて兵船のうこの手見えしハ浮嶋黒田きつと見渡
し麻生の新庄藏人ら藤巴の旗印ふり定めて向ふとこえて候

我々先不進むべきあり引ついで漕よせ給ひと船を猛ふそ
しらせなう不俄不民の風吹起り空う曇り雨を催し寄手の
船自在ならん藏人是と見て大ふよろこび得たりやかこ
とくだんの船を矢のおとく寄手八十艘の中へ漕のきそ火水
みあれとせめたるる西土岐えあぞ大事と下知をふし豎
横むあゆん不戦へ共麻生勢ハ船軍ふあれ上船ハ逆ろと
艘船あきハ飛鳥のごとく自由をなし殊不艘船ハ土藏のごと
作りおれバ敵の矢玉ハつもあたらん空矢のこめて有るれば
新庄勢のさこち乗こしくさかく不切立られハ寄手討し
このあびたさし時崎弥兵衛羽賀次郎松山兵衛村田次郎左衛
門佐藏齊宮太田半弥柴崎忠平伊佐津太郎と初めとして究竟
の兵八十餘人討死を新庄ハ唯一戦不敵船十八艘分捕し勝と
こ揚て帰しりバ直昌が武勇いと高くぞ聞えらる

湖水龍窟

乾子何多う世ふの流波山將まきこぬ土浦の
 城を冬草るふ足ゆる高家の麓尾巻跡多り
 飛くこあやまらぬ男の川西末は白く山の
 流をさうも潮末の森ハ遠く入りしよきとく深
 岩のさきハ浪を旬旬を伏るうみし少き
 加茂明神の社を境び沖宿立木の両大熊
 窟多し北岩子歌を大慈の晴をまよとす

高須の松ハ安け崎の舞子からきて又くハ
 舞舞急をを願まは川末の杜蔭を有るハ
 勢主と峯社尊尾山道耳の架りる流石跡ハ
 田舎の子屋を流をを理常よの希き御座
 流石小舟ハ漁舟あるのこまき人影は
 又くこまきはまは抄を流の浦からる

小石のよいりしつゝのちる柳

川井舎 

○是より川南

一宮大明神 下總植生郡矢口村小あり 佐倉風土記云傳延長二年九月十九日祭之

二宮大明神 同松崎村小あり年記詳あらむ經津主命と祭と云

三宮大明神 同成田より二三町西の方郷部村小あり祭神詳ら

あらむ相馬日記小郷部村小植生大明神の社ありて鳥居不當

國三宮といふ額をかくこい神名帳小へ見えぬ神あり云

三熊野大明神 南羽鳥小あり延長元年八月十五日祭といふ

たつ稿荷社 龍臺村利根川の畔堤の上小あり

長沼 佐倉風土記云沮於植生郡北南北可五六里西東可六七里

一六丁多利於溉灌復宜於漁釣舟楫亦通但不可致大爾首南尾北

尾爲兩派西過安西新田東經西大領賀俱入利根川亦時有陰火

新妻川 同書云一水出畑田東西北流十餘里至金山西一水出

于印播郡江弁領西東北流七里至于下金山西二水會於此西北

七八里而入長沼馬 佐倉風土記之里程皆六丁一里以下准之

飯岡川 出東和泉東西流過飯岡歷荒海南橋下而入于長沼

水榭川 出大室東十里西北流過水榭而入於長沼

長沼城跡 長沼村の上小あり城主詳あらむ常總軍記千葉手配

の条小へ長沼ハ大野修理と見えたり

源太河岸 香取郡榛山村あり金江津と相對是是より滑川觀音

へ八町成田山へ三里

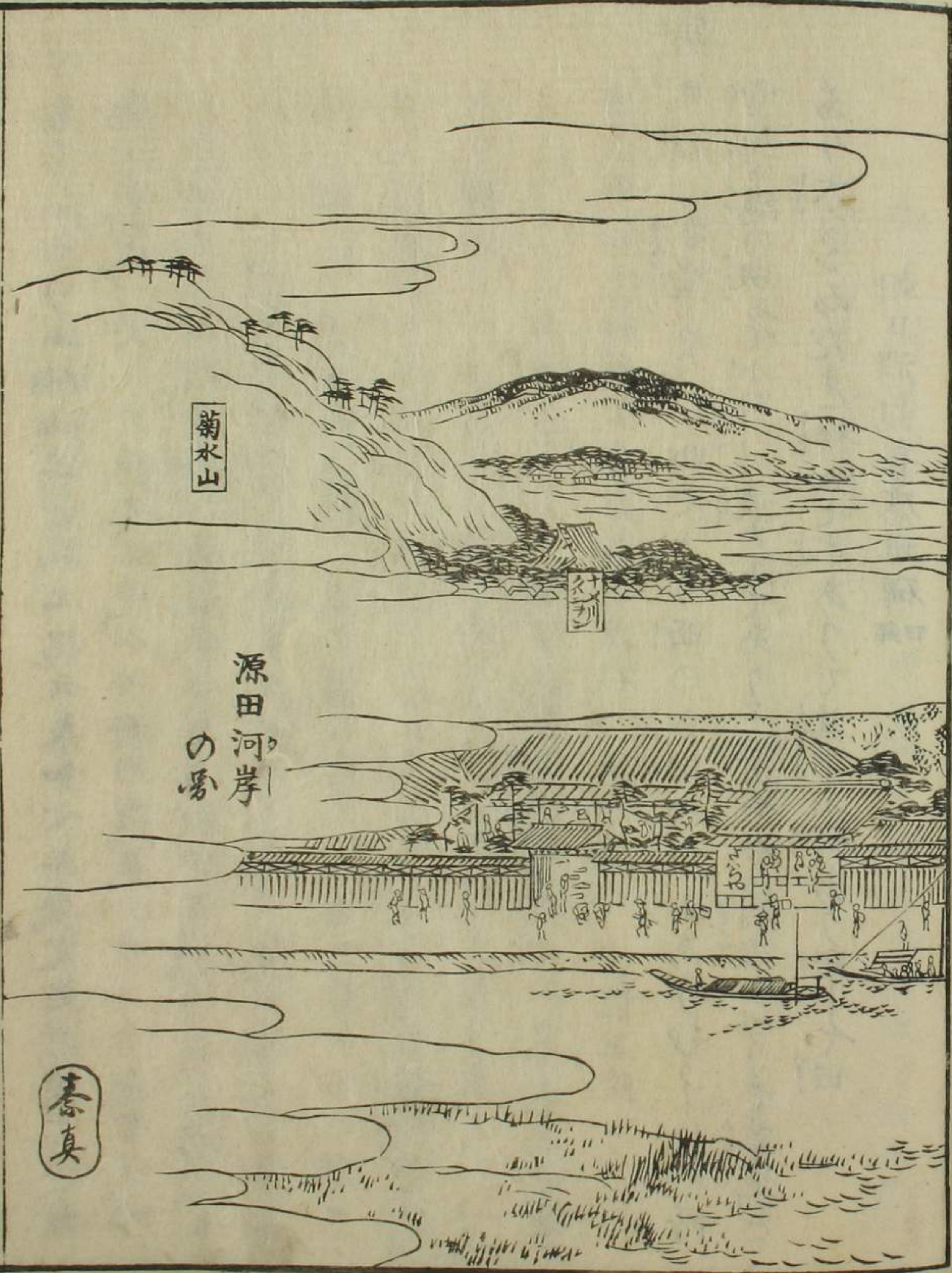
滑川觀世音 滑川村小あり滑川山龍正院といふ坂東順禮二十

八番の灵場あり本尊十一面觀世音 御長一丈二脇立不動明王

昆沙門天あり人皇五十四代仁明天皇の御宇兼和七庚申の年

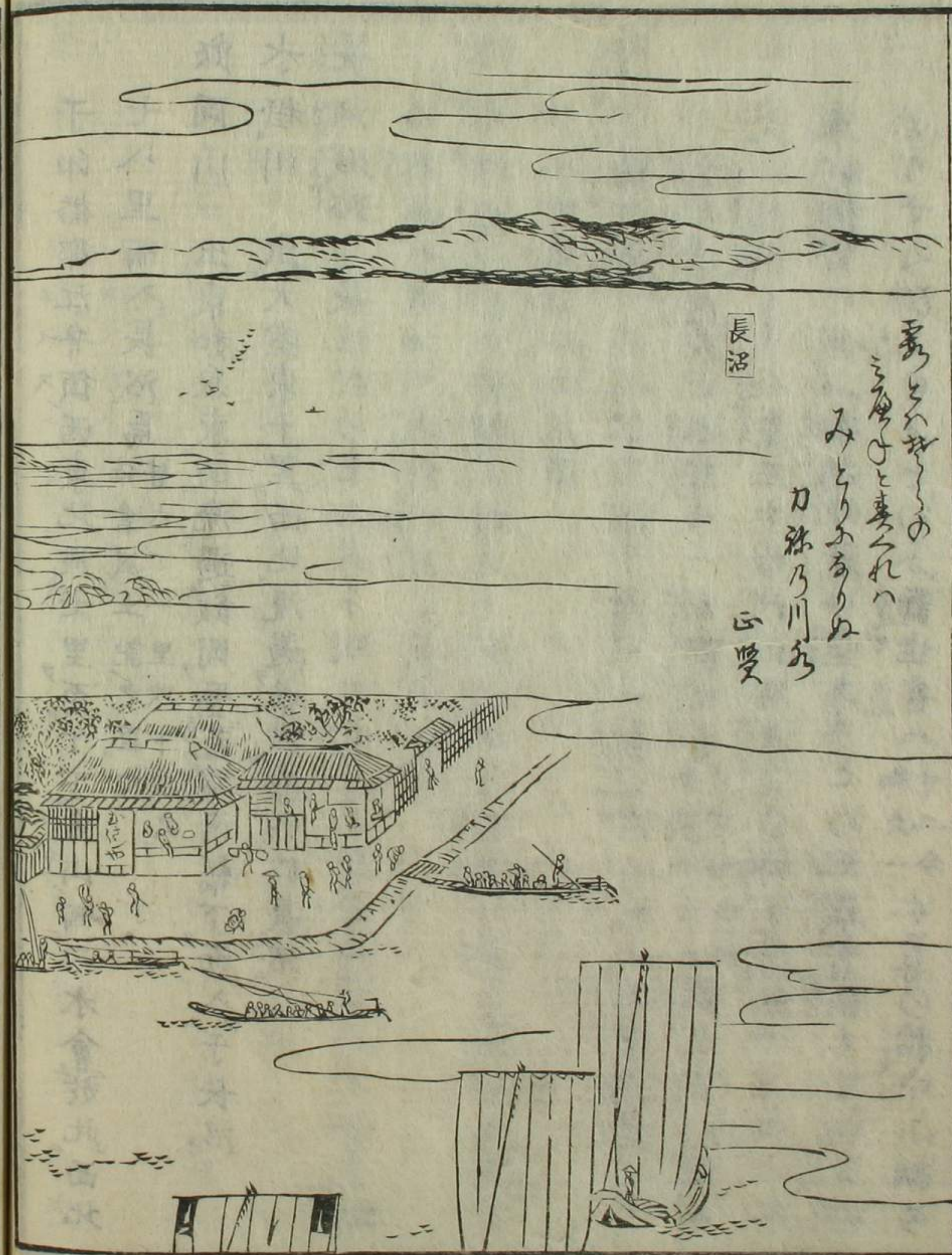
草創御堂の側小船越地藏の堂ありこの地藏尊綱もて朝日淵

よりすそひ上りといふ觀世音ハ御大一寸二分今本尊の胎中小綱め



源田河岸
の景

春真



長沼

春の
景色と
まはる
みどり
の川
正受

あまふとりのふ趣起佐倉風土記云兼和七年安定朝所鑄十一面
觀世音長一丈二尺號龍正院小田將治舉長一寸二分觀音及地
藏像於小田川朝日淵以觀音納本尊腹初將治感化女自稱朝日
言粉河寺來又老僧可八十網衣浸水而後得二像云鹿嶋日記小
鐘の銘銘下總國香取郡大須賀保内滑川山龍正院天和二歲癸
亥四月廿六日と多まり本尊へ兼和のころ小田宰相將治常陸
と下總のさうひあふ小田川のけさがあちよりとり出ていつ
さまつりー冥像あふよー坂東觀音冥場記九のふんゆまの諸
國圭齊録下總國天台宗部小五石植生郡滑川村龍正院
朝日淵 本堂より一町をくり西の方田の中ふありむくへ此所
常陸下總の堰あて小田川の流きあてありーあや今の淵瀬かくりて草地と
あり大あふあだまヤサキ押六七本ありて其下ふ碑あり彫て曰
朝日淵觀音應現碑銘

朝日之淵薩埵湯朝日淵聖像入網瀑靈液湧清人死
感享者誰長者將治

東叡凌雲院住持探題前大僧正實乘撰
寛政九年丁巳七月

南郭集三編二十九 舟遊刀祢阻雨泊滑河村二首

長江三百里短棹一孤舟水上迷冥雨風前避急流兼葭投泊渚
雲霧問津樓登岸知何處蒼茫惹旅愁

江村春雨裏寥落暮煙疎挈榼傾求酒臨河定得魚蓬窓從泛宅
葦笠混幽居濯足滄浪水行應隱釣漁

菊水井 滑川町入口道の東菊水山の麓ふあり方六尺をくり石
ふて圍たう清水井あり觀音の靈水とりの側ふ菊水とるりと
る碑あり

菊水山城跡 滑川村菊水山の上ふあり佐倉風土記云傳小田氏

朝日淵
の
湯

川南



十一

五



春真

城之世居之按小田之系出自粟田関白道兼而五世八田宗綱以源義朝子知家爲嗣其七世正三位中將兼常陸介治久其七世左京大夫政治相續領常陸國其子讚岐守氏治号天爲佐竹氏所襲遁於相摸國藤沢慶長六年終于越前國其城址在常陸國小田而筑波田土邊今泉田伏木田土浦沢辺常名北條片野栢岳真壁完戸行方海上藤沢戸崎矢田部江戸崎蝦鹿嶋足高牛久牛子生志筑山木水守小美川龍崎上室近田沼崎荻間巖崎巖田楫馬八代皆其子城家臣之所居也疑小田所領地跨此境而以菊水山或爲別業或爲退老之處者歟東國戰記有滑川城主小田左京大夫政治是與小田太守同人乎未之詳焉又按長元年中小田莊司義英屬下總國司藤原包昌防平忠常焉又散見於太平記者関東軍有小田常陸前司貞宗馬小田民部太輔兼秋預萬里小路藤房俗放流者於家以預後送卿于京馬小田中將小田讚岐守小田中務大輔亦

在馬又北條記有小田宰相政治遣其臣菅谷隱岐守率兵屬氏康爲而滑川觀音緣記爲康和年時有小田宰相將治者未之詳焉恐似傳聞之誤彼姑傳疑聊辨之

耀窟大明神

同書在西大須賀村社後地有一孔拜之爲神在未詳

其神及造建時世俗言鹿嶋神之祖父也若由是稜威雄走神也歟

正德五年社司飯岡氏請進正一位云

八幡大明神

同村堤の内ふあり堤の向ふ八幡沼といふぬまの

里て其中ふ鳥居たてり

東三井寺

同村ふあり云傳ふ是日本三三井寺の其一ふと云

瑠璃光山千手院

といふ天台本尊千手觀音側ふ藥師堂あり堂

の脇ふ井三あり故ふ名づく歟其初め詳らぶらざまど後ろの

山間淺佛具殿谷といひて中英ふ屋敷跡あり又其頃の寺田ふ

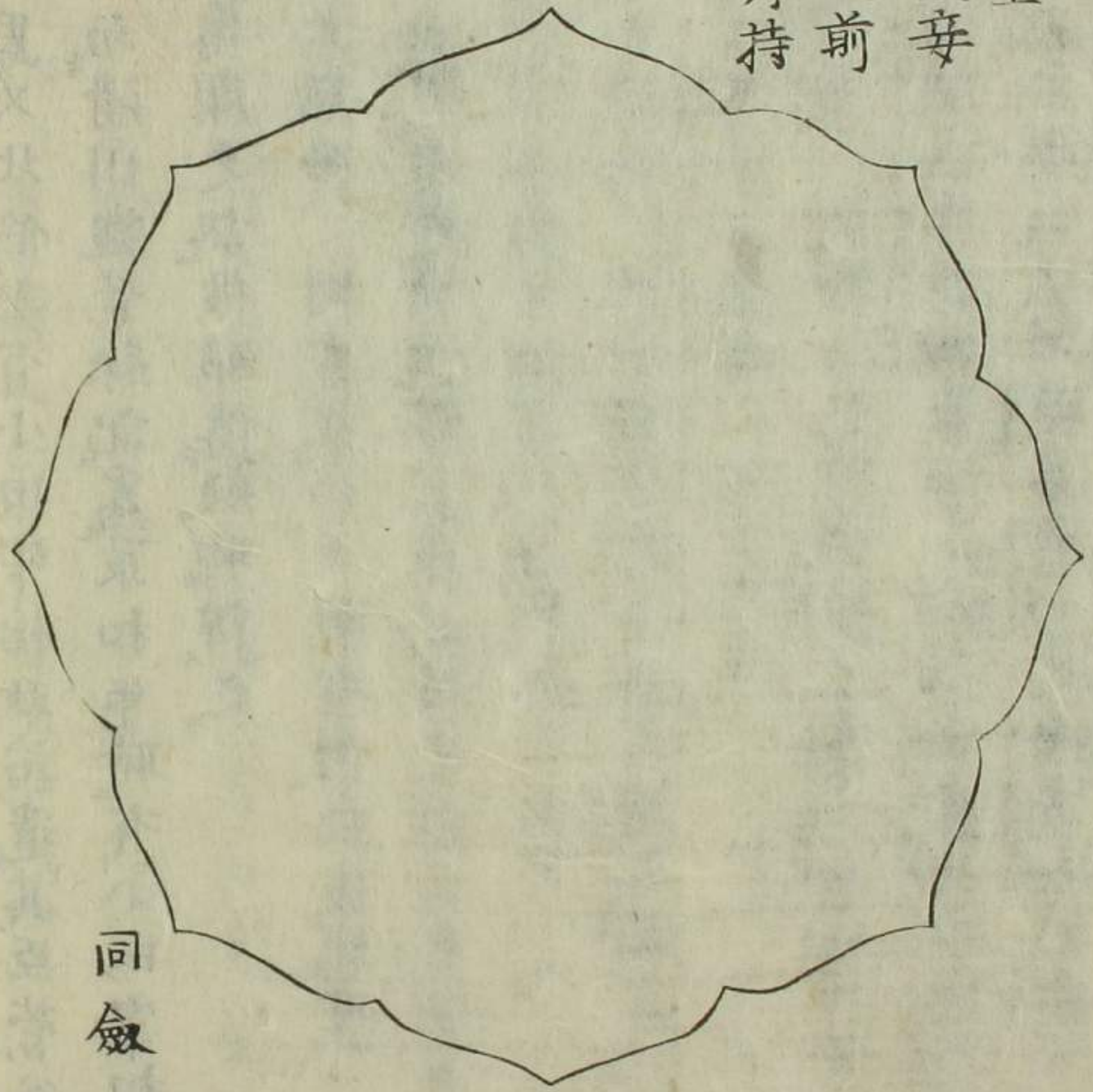
りとして村中ふ佛具殿田と唱ふる田多くあり。寺寶ふ平親皇

西大須賀村
東三井寺
瑠璃光山子手院
什物

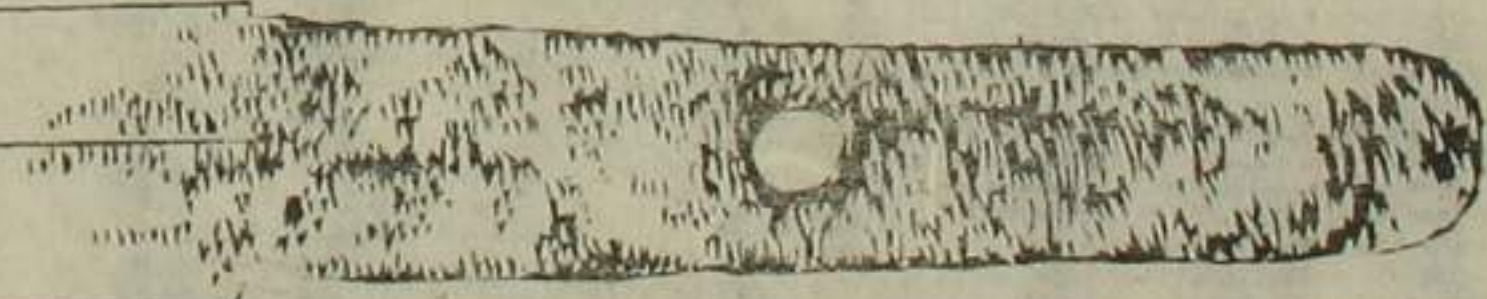
平新皇
將門母

桔梗之前
所持

鏡表



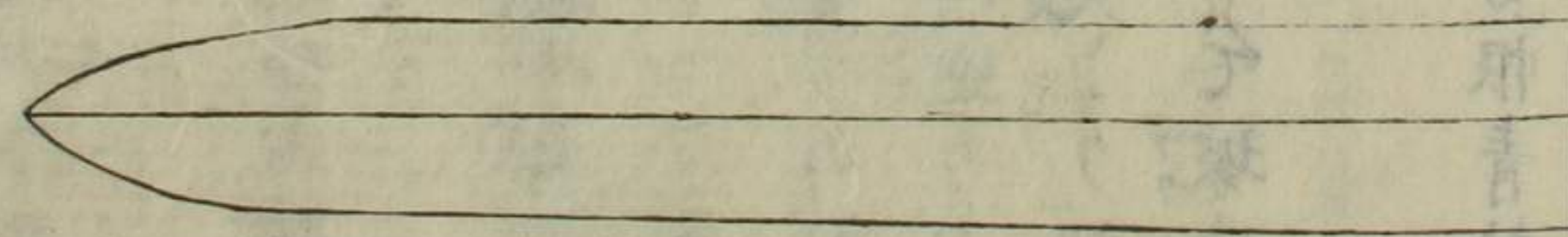
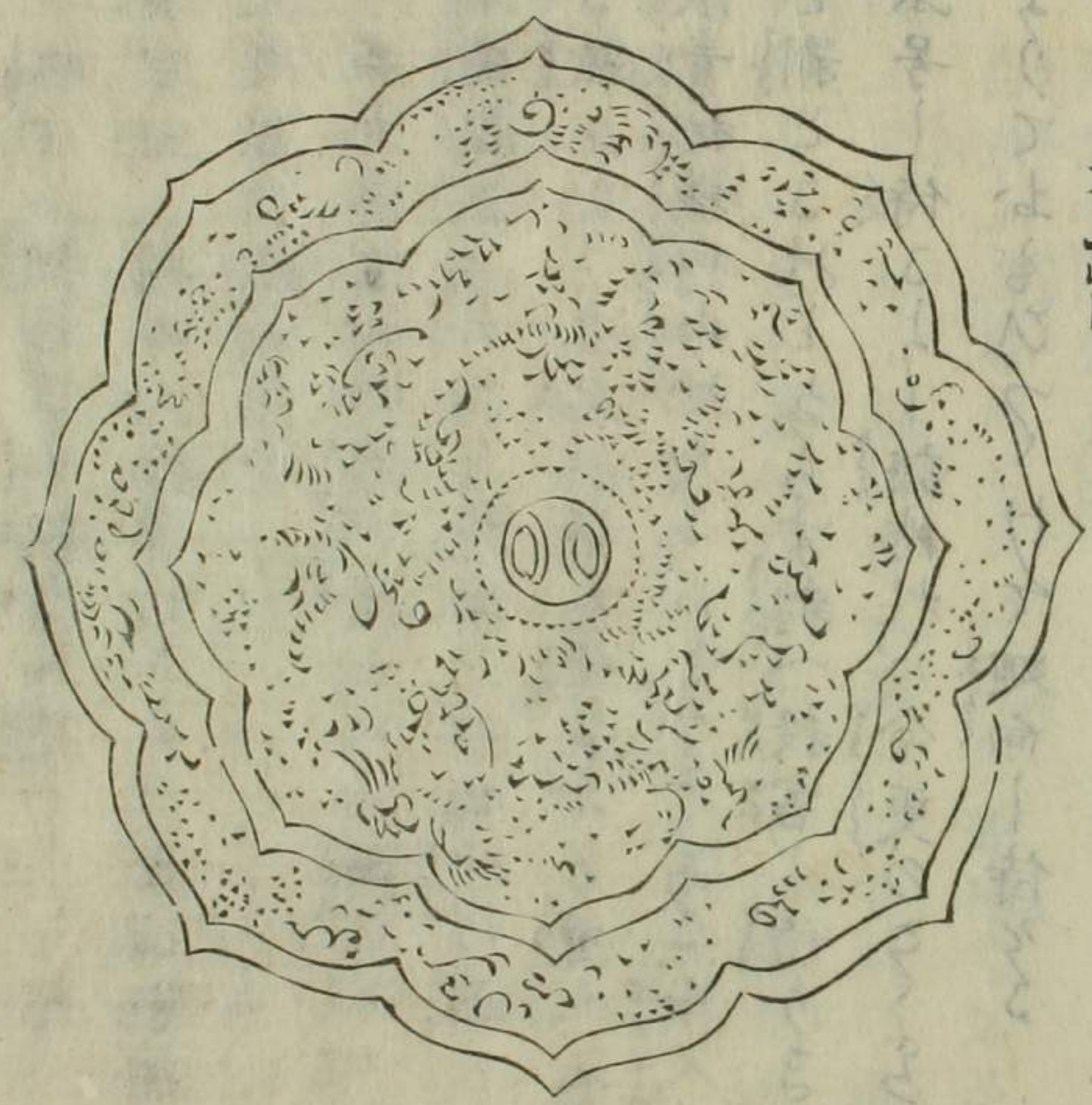
同鏡



銘
平新皇

大和如圖

同裏



將門の妾桔梗の前此鏡一面同懐劍あり里老云この二品むり
しより紛失の事度々ありしが必その家ふたり有りて持主よ
り又此寺小納むる事數度ふ及べりとぞ

西大須賀城 同西大須賀村ふあり東國戰記ふ西大須賀の城主

西大須賀六郎と見ゆ

兒塚 西大須賀村の内四屋といふ所の入口道の東畑の中ふあ

る故ふかゝる名此所を侍るそと里人ふ尋なれば去の在所

白浪青林横行の地たるふよりとある少人此通りなるふ衣裳

など刺とるれとあらす刺へ殺害し侍りる夫より此所残かや

うふ号し侍るより語侍れば今更のこちちて塚はをとり

立よりておもひつゝけて廻向し侍る

佳人落命荒原上 薺庭古碑空刻名 勿恨青林犯花影

浮生有限辱兼榮

白浪小浮名残ふが兒の原戀ちふをつる身とも聞バや

標注小兒の原下總國香取郡大須賀村の道の邊小兒塚あり此

邊則兒の原也今叢祠鳥居ありて里俗兒大明神と云埴生郡の

是ハ香源太河岸より香取郡の滑川觀音ふつこの間也小異

取郡也源太河岸より行ハ滑川觀音夫より西大須賀村と過て同村の

東國戰記小所ノ名ヲ問バ兒子が原ト申ケル下總守義長西大

須賀六郎ニ向テ兒ケ原ニ謂レ有ヤト云申上ケルハ昔小菅且

林寺ノ住寺智證上人此處ニ間居ス或時智證隣村ニ行日暮テ

歸リシニ此原二年頃十五六ノ童子顔色青サメタルガ立煩居

タリ上人云御身未ダ若年日暮ニ及テ何方へ行者ト見答テ

曰某ハ都方ノ者ニテ候處喘息ヲ長ク煩シガ家乏シク療治不

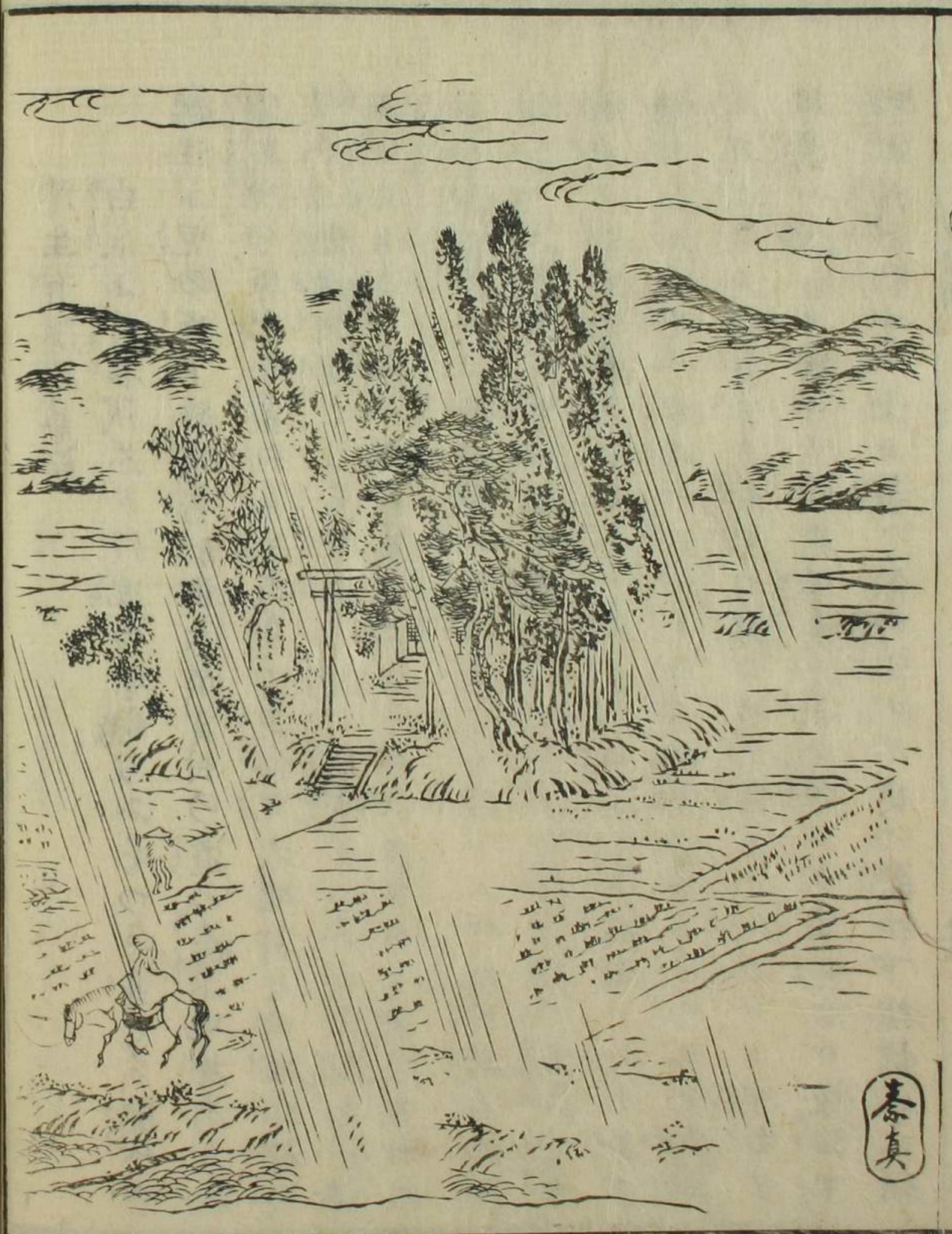
叶故清水觀音へ七日籠り候所滿ズル夜ノ夢ニ下總國西大須

兒塚
の
圖

あふりふりき名塚
あふりふりこの糸
こひちみまつ
身ともまつらや
道興准后

川南

廿六



春真

賀ニ智證ト云高僧アリ尋行テ血脉ヲ傳ナハ本復スベシトノ
 告ニ依テ叅候ヘ共草卧テ一足モ引レズ哀レ西大須賀ヲ教玉
 へト申智證聞テ其人ハ我也トテ菴ニ伴ヒ昼夜礼拜念佛一千
 日修サセケレバ次第ニ全快ス行滿チテ法ヲ授ケ都ニ歸スベ
 シト仰ケレバ童子悦ビ休ミケル其夜智證ノ夢ニ童子見エテ
 曰我實ハ人間ニ非ズ長沼ニ住ル主也三熱ノ苦ヲ不道故ニ童
 子ト成テ血脉ヲ戴キ其苦ヲ免レ今天上致ス也報恩ニハ永ク
 此處ノ守護神ト成テ民ヲ可守ト云テ失又依之其處ニ今宮明
 神ト觀請ス云智證ノ菴室ハ遷化ノ後寺ヲ建号正福寺云取意略
 今思ふ小あの説ハ後人の作あるべし
 又佐倉風土記小東國戰記を引テ有永祿中僧來于此而詠歌曰
 知具乃波羅能遲波志留毛乃與茂阿良自等古呂途比斗都迺志
 流之那那礼婆由是觀之文明中有碑而至永祿中碑已失乎今僅

有小祠而俗謂之兒宮馬近年ほど祠の側小
 因云幡谷村ハ是より程近き所也市川團十郎父幡谷村の産
 了より馬馬ハ芝居年代記小堀越十藏生國ハ下總國佐倉幡谷
 村の産ありその子知名海老藏こき唐犬十右衛門名づく所
 あり長くて市川團十郎といふ取意
 助崎城 名古屋村小あり佐倉風土記小距佐倉東北三十六里千
 葉常胤六子第四胤信居大須賀稱大須賀四郎後退老於此而稱
 信濃守其子孫二十葉居之東國戰記有助崎城主大須賀信濃守
 信景馬天正十八年與千葉氏俱滅城廢馬壘有舊新二址其舊處
 生獨活甚美盛人採之乃為崇近歲村僧採而還菴其夜戶外有聲
 曰還獨活竟夜不止僧怖畏不寢夙興還於其處云
 公家塚 同村小あり其地言小御門至今不得畚菑傳有貴卿流卒
 干此味詳為何人俗言 朝廷貴爵人謂公家也按元弘之亂笠置

城階北條高時執^テ 後醍醐帝近侍諸卿流^ラ之遠國平大納言師賢^{モレ}配^レ下總國寓^ス千葉貞胤乃薙髮名索貞遂卒^ス于下總實元弘二年十月而南朝追謚^ス文貞公車出^ツ公卿補任增鏡常樂記等初師賢詐稱^シ主上登^ル于叡山今以小御門名推^レ之恐師賢墓與

高岡 香取郡あり源太河岸より十五六町東の方井上侯の陳宮あり石一万天正十八庚寅年領地拜領下總國香取郡高岡二万石

阿部豊後 龍安寺 大和田村あり諸國圭齊録下總國曹洞宗の部ふ二十

一石七斗餘 香取郡大和田村龍安寺と見ゆ

迎接寺 佐倉風土記在冬父未詳年歷佛器多識永仁三年有觀音

閻魔夜叉等假面十餘枚言惠心之所作云此の寺小鬼の舞と云

六とあり閻魔大王ふと美々しく衣冠を粧ひ皆面をかみり赤

鬼青鬼など多く出地獄して死人を責るうねをかさいと賑り

是も廿年小一度になるにござる佛の假面鬼の假面牛頭馬頭

などの假面いさましくあつたものありとつり 下小堀村へ又

父より神崎佐原津の宮あり 經て小見川のそこ一上あり

名木古城 佐倉風土記ふ云在名木距佐倉東北四十里傳柴山彈

正居之未詳其時世馬東國戰記所謂名木彈正忠是乎

神宮寺 並木村あり諸國圭齊録新義真言部ふ十四石四斗餘

香取郡並木村 神宮寺あり

神崎明神 神崎ふあり利根川へあり出たる高き山の上ありむ

かこの山の麓屈曲の所水逆卷て船の通路至てむつりく是

を神崎の巻と唱へて船人大小恐る所ありと云り今此洲い

ふ其頃此舟唄ありとてあつた神崎森の下楫をよくとき船主

どのこの唄今もよくうたふ

五
川南



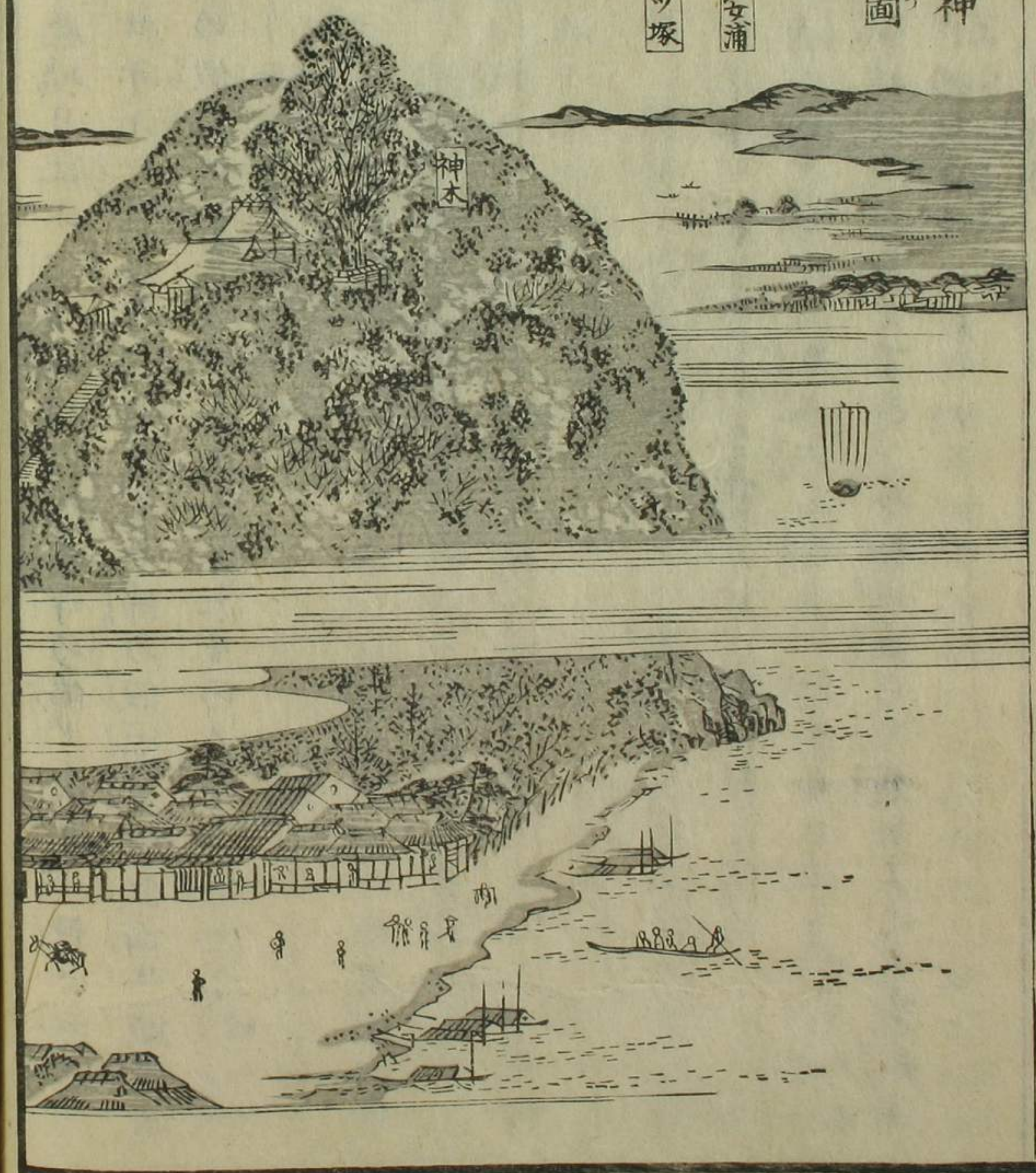
下利根川

廿九

春真

神崎明神
の圖

男女浦
ニツ塚



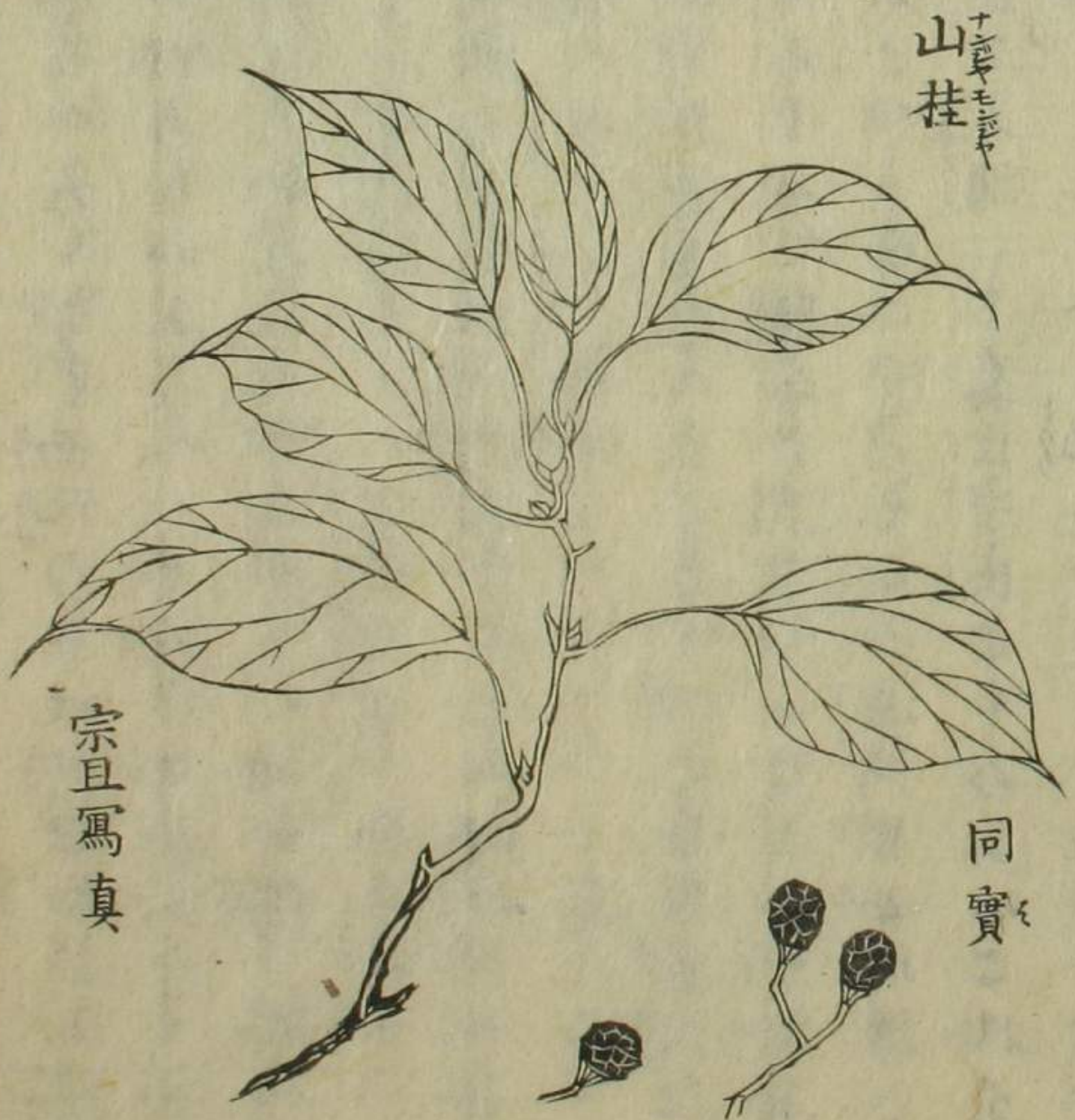
香取志云神宮を相距三里餘同郡神崎村不在傳云面足尊惶
 根尊を祭まりと此社今神宮より幣帛を備せ封物を與せ別官
 より神地を賜りて神事を執る末社非也然共昔大戸神
 崎兩莊へ別て神宮祭祀の用途を掌り改造の時ハ臈殿を造る
 定役也又此兩莊へ大祢宜家の旧領也長寛二年六月関白左太
 臣家政所御下文不見えとり斯て大戸社末社なきハ神崎社も
 昔末社あるを決す

追考應保二年六月三日の大祢宜日記不又於次男知房者申補
 神崎社宮司可知行彼社領之由書與讓狀畢又嘉元二年四月廿
 二日大祢宜實綱与棄狀不讓與下總國香取社領云大戸神崎村
 田櫻田以下神祭物等之事是等の文を以て見きハ昔末社ある
 む更愈明け

鹿嶋日記不云かうござり此神社不詣づ社の前ふふんトヤもん

トヤとよぶ大樹ありいと年へたる桂の木なりけり
 神代より志けりてたて湯津桂さかえゆくらんかたり志
 らんも

山桂 本草綱目月桂條
草木錦葉集六行
 枝葉とも白ひい
 樟腦のおと一葉
 トて吞バ桂枝ふ
 似たり實ハ榎の
 實不似て皺あり
 茶色あて少一黒
 を帶たり八月頃
 落る花ハ大木故
 見えがごと



山桂

同實

宗且寫真

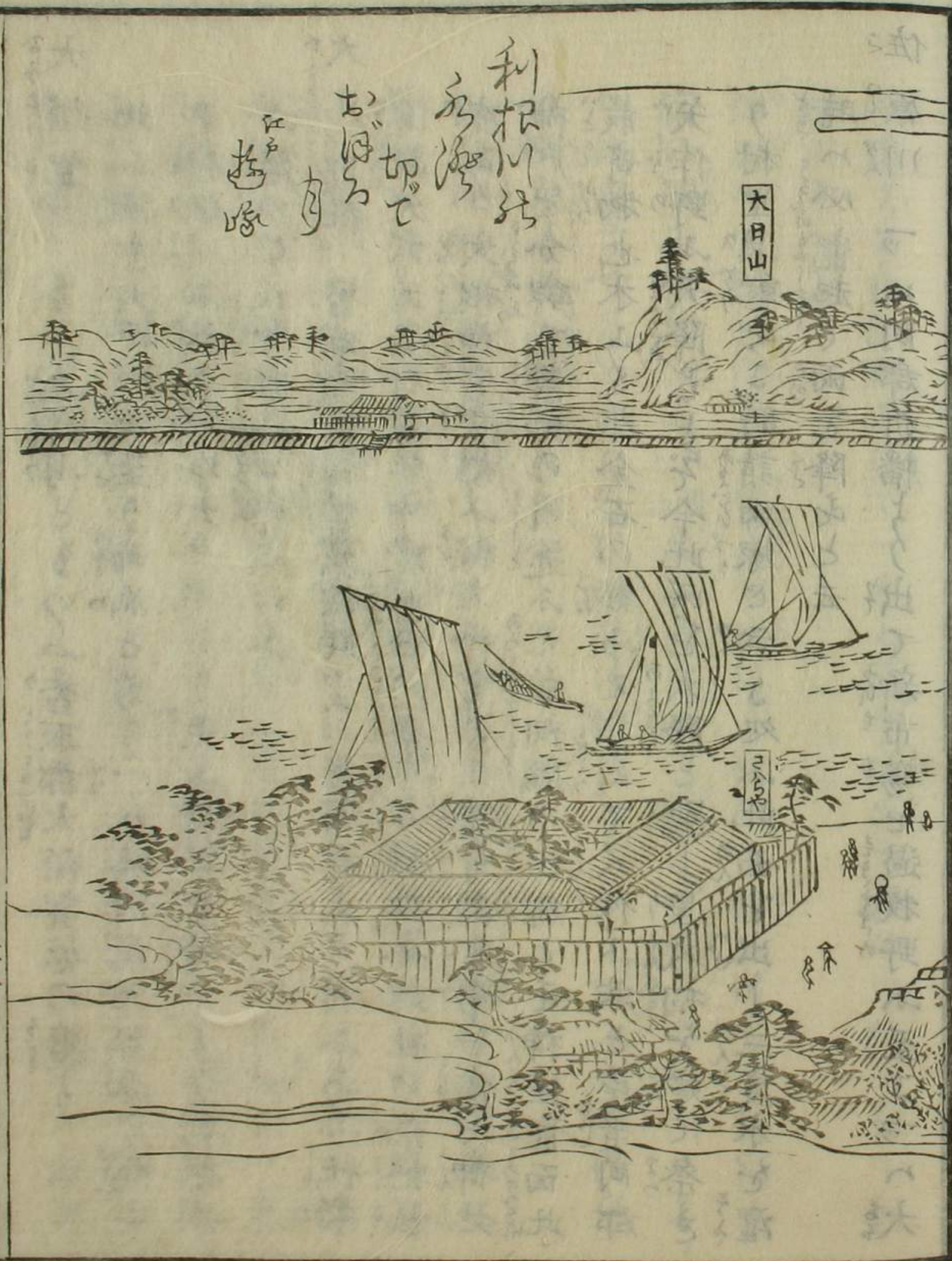
五
そもく神崎てふ地名ハありよる西北の方此河むかひ不清久
橋向押砂ふどの村ありいふ一へハカ根の河面ふたごさた
り一不元和慶長のころかたさ此方ふ水せく堤を築て新田を
むらりきたありとそむのらふとい常陸國河内郡の半田の里
ふさ一むりひて二里をくりけ大沼ありこの神崎の地ハさ一
出たる山崎みて神の社阿れば神崎といつへりとあんこよ
り見渡一の中嶋ふ片葉葦もろそあ一とて二くさの葦生たり
上つうとあるいそろそみて陽あ里下つめさなるハ片葉ふて
陰ありそれ嶋をふとつとぬといひその浦茂男女此浦とい
ふ平治元年の社圖ふ大浦とも真世守良ともあるハこれあり
その嶋ふ大神天降ま一を今の地ふうつ一まぬらせたり半
田此里ふても此神をうつしていそひちりけん今俗ふた一
まさはといふ社ありそハ安婆嶋のよこなよりみやこの近さ

ことりある安波大杉明神もかよひてたこ常陸風土記ふは
安婆之嶋とみえさうりそのふたつ嶋より時々龍燈あがりて神
崎の社ふか、り志バ一ありてもと此所ふ一へむねつること
ありとるんま一三代實録不元慶三年四月下總國正六位上子
松の神不從五位下を授らま一ことみ由神崎の西隣の里不今
も小松村ありて正元元年十二月の文書同二年三月此文書ふ
どに小松郷みえたるをむふふこれぞ子松此神あること疑
あうりけ

諸國圭齋録下總國部ふ二十石大明神 香取郡神崎郷 神崎伊織

と見ゆ
押砂河岸 神崎と相對て川北あり中古大水の節砂お一來りて
出來一地ある故押砂と名つくとといふ安波大杉明神へ參詣の
人ハこ此河岸より土一安波一里半

川南



利根川
 水
 切
 ち
 お
 ぼ
 ら
 江
 戸
 遊
 覧

大日山

世二

五

お
 ー
 ナ
 ザ
 ー
 押
 砂
 河
 岸
 よ
 り
 神
 崎
 眺
 望
 の
 圖



ア
 タ
 ゴ

神
 崎
 森

春
 真

大須賀川 ちよ大戸川ともいふ香取郡大須賀原の邊より出て
北に流き大戸川に至り兩派とあり一は北川尻沼谷原の間
里利根川に入り一は利根川より東に流れ岩崎下より利根川
に落つこれを粉名口川といふ

大戸神社 香取志云神宮茂相距二里同郡大戸村にあり社家
傳説天武天皇白鳳年中建此社所祭手力雄神也此社の祭祀數
度あり大槻神宮祭祀に擬又神宮より諸神饌幣帛を備せ神地
神戸を分與て祭祀の用途に充並祠職の秩録とを神室龍面此
最奇物也木も非金石の類も非因て人作も非と昔同郡
矢作野に天降ると今此所を天降と號し里人祠を建て祭ま
り村里早魃する時請雨塚と云ふ処に此面を出し三度水を濯
時必龍起て雨を降すと云

佐原川 同郡折幡より出て新市場を過牧野に至る一は大

崎邊より出牧野に至て一水とあり佐原大橋の下を流れて利

根川に入る

佐原へ下利根附茅一繁昌の地なり村の中程に川有て新宿本
宿の間小橋残架と大橋米穀諸荷物の揚さげ旅人の船川口よ
り此所まで先をあらそひ兩岸の狭さをうらと誠小水陸往來
の群集昼夜止時あり

諏訪明神社西の方村をつき小有新宿組の産土神あり例祭九
月十五日より十七日迄也牛頭天王社東の方濱宿といふ所小
河り本宿組に産土神と例祭六月十一日より十三日迄これ
兩祭礼至て賑はしく何れも二重三重に屋臺十四五輛つゝ花
をかざり金銀をちりばめ錦繡の幕を懸囉子定の拍子つと
みぎやう小町々をむさほく見物に群集人の山をなすこと
とに目ざす一は祭あり

香取魚彦うどりまひこ佐原橋本町伊能茂左衛門いづのしげさむらいと云い頌則すねのりの香取かとり四家集しけあひ

良称りやうしやう茂左衛門しげさむらい彌青藍香取やひあざな郡佐原人さきはら畧既長篤りやくいぢやうあつ學嗜古游まなぶこゆう賀茂真がもまこと
淵之門ふちのかど學益進まなぶえきしん畧其作歌りやくしやうか以萬葉集いばんやふし為歸別たゝまひ為一家たゝまひ趣おもむ善西ぜんせい好寫こうしやう
梅花ばな及鯉魚いり騰泉たうせん之類しゆ亦為世賞またたゝまひ玩天明年あそびあまのとし三月みづき二十三日にじふにち歿于なげ
江戸濱町えどはま橋居はしゑ年六十としむそ其在江戶こゝろ以自稱よみ香取魚彦かとりいづの故以香取氏ゆゑかとりし顯あは
所著しよ有古言あひ授萬葉集まなぶ千歌ちか華端はなは記兩ふた
夜燭よじゆ百人ひやくにん一首傳魚彦ひとしう家集いけあひ等若于卷らうじやく

二本竹ふたもとけ 鹿嶋日記しかじふ云い諏方神社すわがの鳥居とりゑをたてていと高たかき石坂いしがた
をたつれば山のえらに別當べつたうの坊ぼうあり坊ぼうの前まへふ天明三年ていめいとい
ふより此夏こゝろとみふふとりとい竹生たけなへ出いけるをり此里こゝろ志こゝろらり

殿津田日向守平信ついでつみた之朝臣あそみのよみたまへる歌あり

松栢まつばらのとれをれきふらぢりてや生なけりけり竹たけのふさりと

南郭集なんかくしふ 將發まさたけ佐原半七さはら彦十載酒ひこ到舟留とふね示二子しにこ

期日將廻棹きじつ不關乘興ふかん輕一樽かろ携酒たづね別二子べつにこ即舟情つね信宿しんじゆく交相得かうしやうとく

江山感且生水やま郷來往きやう熟重じゆく聽竹枝聲たけえだ
寬齋遺藁かんさいいづらう 佐原訪此江山主人さはら不遇ふぐ因作いんさく

千里游踪せんりゆう偶遠尋柴門ぐう空鎖碧江くう潯開庭せん就欲題名しゆ姓春淺芭蕉未

展心てんしん

津宮河岸つみやがは 香取神宮かとりしんみやう一の鳥居いち水中すいぢゆう不建ふけんり是こゝろより香取かとり三社さんしや參詣さんぎ

の人ひとふれ河岸がはより上かみり神宮しんみやうへ參詣さんぎ津宮つみやうの名義なごうへ當所たうじよ不ふ籠かご

神社しんじやといふありて香取志かとりし小奥津彦こおくつひこ神かみ奥津おくつ姫神ひめかみを祭まつり此神こゝろ

へ古事記こことし須佐之男命すさのおののみことの孫大年神まねとしのかみの子こあり延喜式えんぎしき小籠神こかごかみ二

座ざ從五位上じゆいご大邑おほ刀自たご次つぎ小邑こ刀自たご云いやいろと素津宮すつみやうといふ

そむく津つといふ湊入みなとの船ふねのくふの處ところふ集風あひを待まちつこきと津

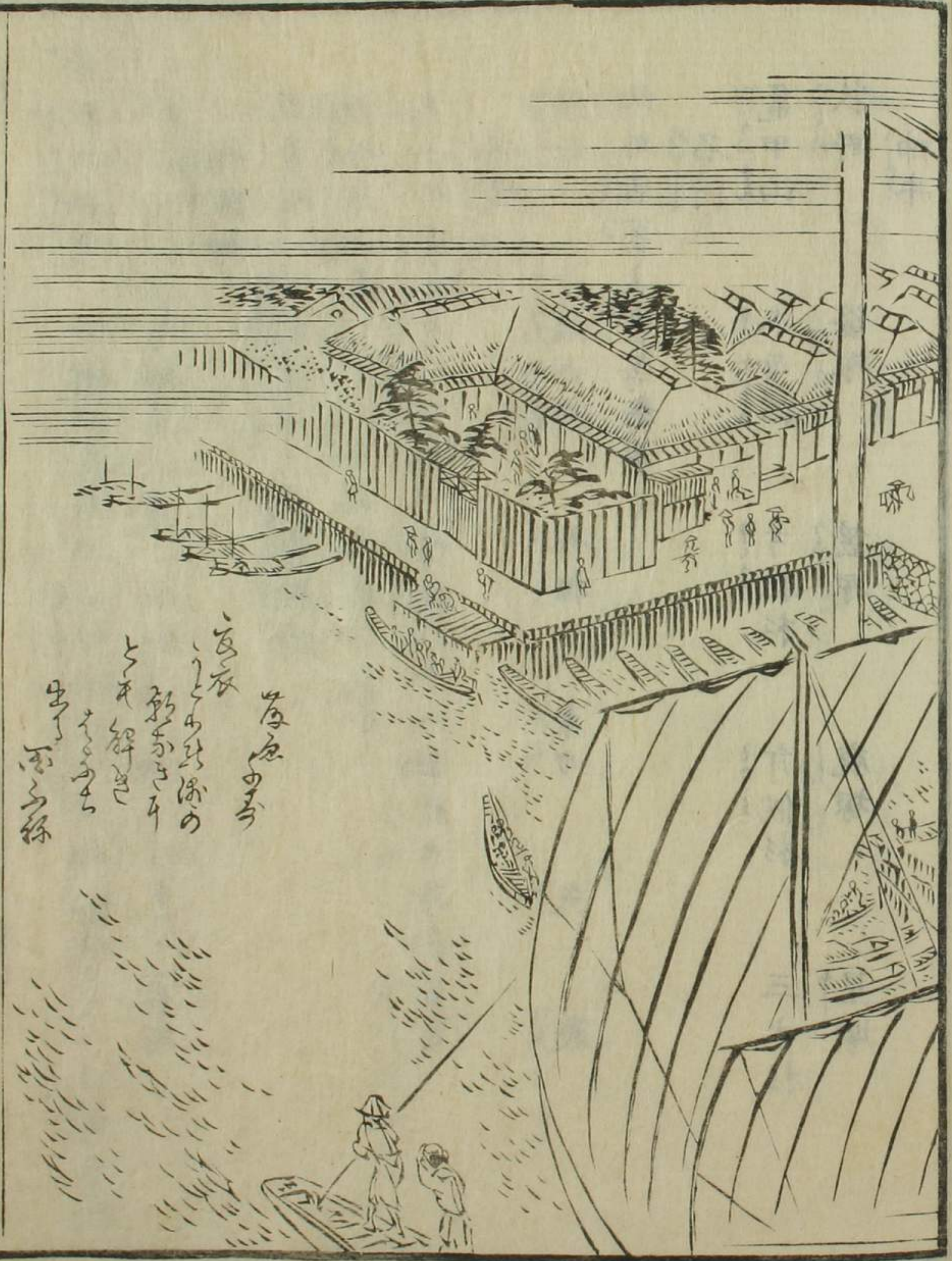
といふふの所ところを船ふねのほとふ所ところ鹿嶋しかふい今大船津いまといふと

もいふいふ津宮つみやうと云いひいより風土記かぜ不見みゆ吾神宮われの津宮つみやう

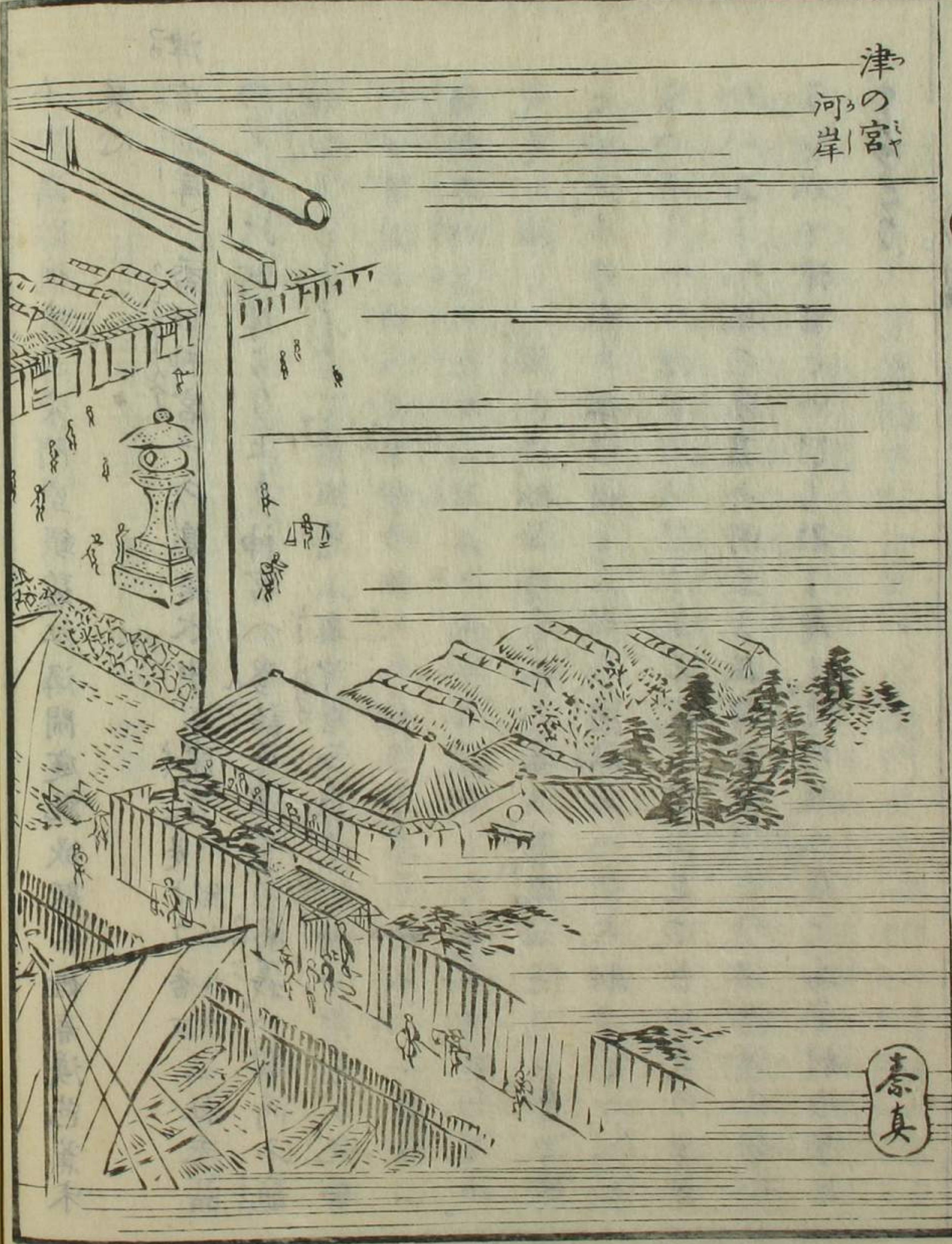
いふいふ船ふねの來集きたあひふ所ところふ了故津ゆゑといひふの津鎮護つちの宮みやた

了を以て津宮つみやうといひいづれ了し庵いんその後人居のちとあり村むらの号なと

もあまり



舟の
 影が
 水に
 映る



香取大神宮 下總國香取郡正殿經津主大神神代よりの御鎮座

みていと古き神あり、夏ハ香取志不詳クふまへ畧之

相殿神

比賣神 天兒屋命 武甕槌神

撰社末祠をへて八十末社之と畧之

大小の祭祀をへて九十餘度内十八箇度大祭祀畧之

神寶

廣矛 干満兩顆 神楯 太刀 矢 鞭

此外古器古書等數多

名所

龜甲山 木母杉 弓掛杉 乍候杉 三本杉

牧野 釜塚 笠塚 鹿塚 星塚

神井

御手洗井 氷室井 龜井 大坂井 琵琶井

下の井 眞彌井 西隱井 東隱井 奴久井

石井 太刀洗井

七橋

大坂橋 五段田橋 萱田橋 小山橋 下井橋

氷室橋 地口橋

八坂

大坂 龜邊坂 若宮坂 下井坂 氷室坂

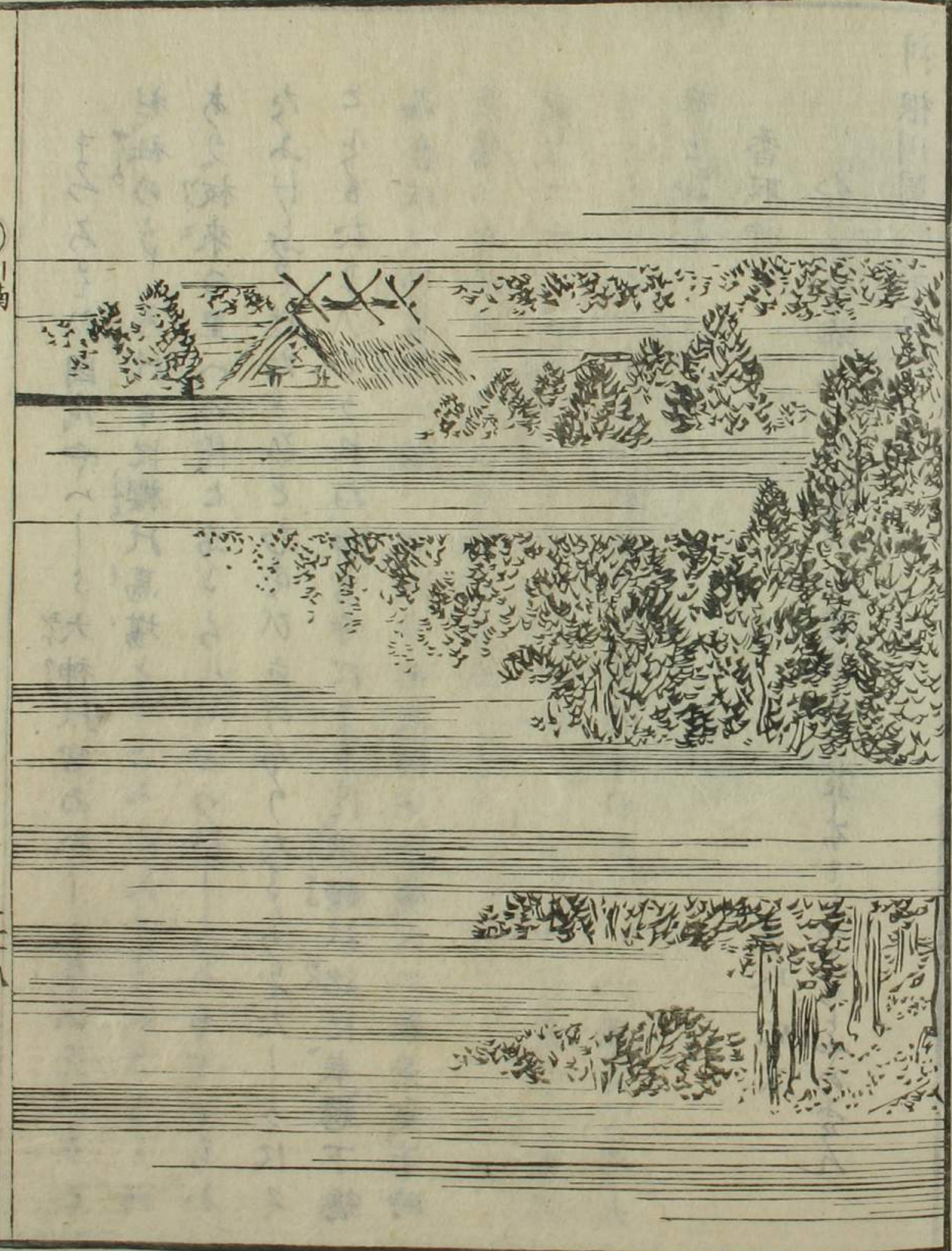
御手洗坂 奴久井坂 幸若坂

此外名勝古跡數多

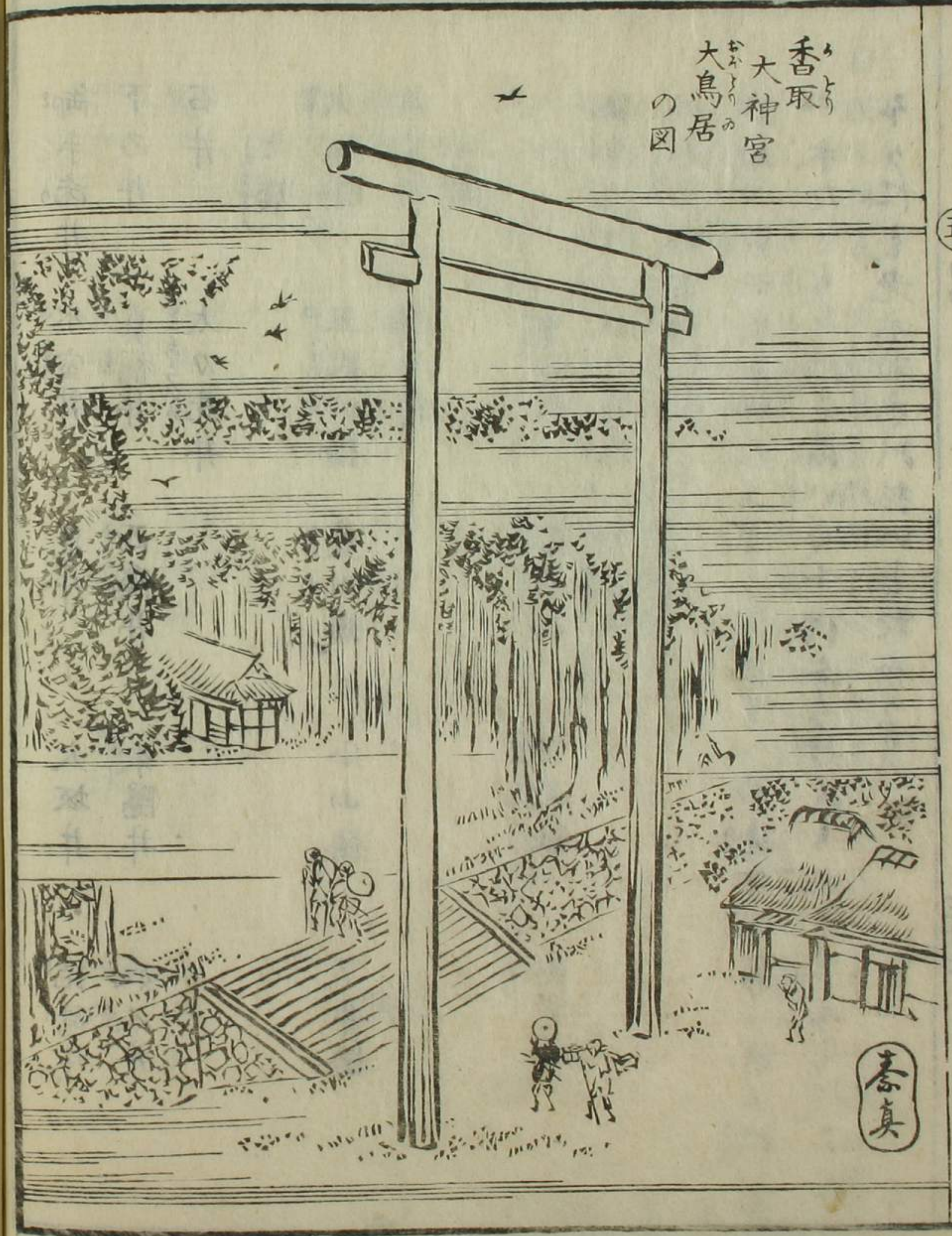
鹿嶋日記云香取神社ふまへに御まへの庭に大なる杉小披ふ

二本たてり、それさほいく千代ふりけんものともあらばこの

やうにも、老木若木に杉いとわわり



香取大神宮
大鳥居の図



香取

まろろそぬ國戎やへー大神此宮あかーこいはれふと
杉社やしろのうしろ此方に櫻さくら馬場ばばとてとなくみさきあさる所
あり板來いたこの里への代とあるらんれどひいーらふとどとちか
たふけふとたふとひとむさび立のかりたるあぞたーうにそ
ことともたむひとくれぬ神宮寺にまうは洪鐘ほうかね銘めいに奉懸ほうけん下總
忍香取大神宮寺大鐘一口大且那周防守宗廣大工泰景重于時
至徳三年丙寅十月口日敬白とゑりたり

總常日記うへ不鹿嶋ふかた大神おんとふらひて世々ふいつくれおへーぬに
神かみあり本殿ほんでん并殿ならび神樂かみ殿でん樓門ろうもん其外の末社すえおなく此國あての大
社とおふふ云

香取神宮

香取正文

かーあさる布都の屋雲の御稜威より草もあつふささやめふらん

